公益財団法人 日本ハンドボール協会編　平成26年11月1日発行(毎月1回1日発行)　通巻547号

ハンドボール

特集
第6回 男子ユースアジア選手権
第43回 全国中学校大会
第41回 全国高等専門学校選手権大会

11月

NOV.2014 No.547



［表紙写真］第6回男子ユースアジア選手権3位入賞の日本代表選手たち

公益財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.or.jp/













販売から賃貸管理までトータルサポート

私たち株式会社ユリカコーポレーションは、お客様方の将来設計において、不動産を用いた資産づくり・将来的な安定収入を得ていただくご提案をさせていただいております。

2014年10月には、自社ブランド『 YURIKA ROSE 』(ユリカ ロゼ) シリーズをスタートさせます！

YURIKA ROSE

代表取締役　青木 理恵

http://yurika-co.jp/

株式会社ユリカコーポレーション

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-6-2 神田セントラルプラザ1202

TEL：03-3525-8986 / FAX：03-5295-8188



「がんばれハンドボール20万人会」サポートについて



公益財団法人 日本ハンドボール協会参事 **中野 利一**

全国の皆様方には、日頃より「がんばれハンドボール20万人会」の活動にご理解とご協力を賜り感謝をいたしております。ここで改めてその組織・活動について申し上げますと、この組織は日本全国でハンドボールにかかわる人数が、総計20万人を達成することを目標に作られた組織です。その内容は、(公財)日本ハンドボール協会に登録している日本協会役員・都道府県役員・公認指導員・チーム役員・選手・審判員等々と会員（サポート会員）の総計の人数です。そして、基本的な目標は、ハンドボール競技の「競技の発展」「競技力の向上」「知名度の拡大」を考慮して作られました。現在の総数は、約12万人です。

そこで、国内の現状をみると中学生・高校生の選手登録者人数が、約半数強を占めています。しかし、今後を考えると少子高齢化の中で、中・高校生の拡大は、期待が薄れます。今早々に考えられることは、小学生チームの登録拡大・地方で活動をしているクラブ・同好会・OBチームの加盟が考えられます。いろいろと考えていくことが急務な課題です。小学生チーム等前述したチームが加盟するには、加盟することに強い魅力を感じてもらえる策も考えなくてはなりません。多くの方々のご意見をいただきたいところです。

そして、「20万人会サポート会員」の会員のさらなる大幅な拡大です。下の表に各都道府県別のサポート会員数を掲げましたが、各都道府県により会員数の相違がみられます。特に、「ファミリー会員」「グループ会員」の入会をお願いいたします。入会の手続きは、日本協会・都道府県協会のホームページに案内されています。

ところで、昨年9月ご承知の通り2020「オリンピック」「パラリンピック」の開催が東京に決定いたしました。大変喜ばしいことです。ハンドボール関係者においても喜ばしいことですが、地元開催に期待と結果を求められます。この素晴らしい機会にハンドボールのダイナミックなプレー・魅力を多くの国民に知っていただき、今以上に認知度の高い競技となるようにハンドボール関係者は努力を惜しまず活動をしましょう。

14年度各カテゴリーの日本代表選手団の活躍はすでに報じられておりご承知のところですが、「女子ジュニア世界選手権」17位、「U22東アジア選手権」男子2位・女子2位、「女子ユース世界選手権」14位、「男子ジュニアアジア選手権」3位（30年振り世界選手権出場権）、「世界学生選手権」男子9位・女子6位、「男子ユースアジア選手権」3位（世界選手権連続出場権）等々、世界・アジアで活躍をしています。アジア大会でも男女ナショナルチームの活躍を期待したいところです。

以上掲げましたが、代表チームは、結果を出しつつ活躍をしています。多くの方々に「20万人会サポート会員」に入会をしていただき日本代表選手に力強い応援と援助をお願いいたします。まずは、ハンドボール人口の増加が必要です。20万人目標達成に今後ともご協力とご理解を改めて宜しくお願いをいたします。

平成25年10月～平成26年9月 （20万人会都道府県別サポート会員数）

北海道 67	青森 1	岩手 3	宮城 110	秋田 0	山形 1	福島 287	茨城 334	栃木 31	群馬 3	埼玉 35	千葉 207	東京 40
神奈川 24	山梨 2	長野 1	新潟 2	富山 26	石川 66	福井 69	静岡 132	愛知 35	三重 5	岐阜 16	滋賀 1	京都 3
大阪 21	兵庫 7	奈良 2	和歌山 39	鳥取 1	島根 1	岡山 59	広島 8	山口 81	香川 70	徳島 0	愛媛 176	高知 1
福岡 29	佐賀 1	長崎 1	熊本 4	大分 265	宮崎 220	鹿児島 1116	沖縄 5226	合計 8829				

第6回 男子 ユースアジア選手権

大会期間：
2014年9月6日－15日
開催都市：
ヨルダン・アンマン

■最終順位
優　勝：韓国
準優勝：カタール
3　位：日本
4　位：バーレーン
5　位：クウェート
6　位：イラク
7　位：イラン
8　位：ヨルダン
9　位：サウジアラビア



6th Asian Men's Youth Handball Championship

団長報告

団長　志々場 修二

この度は第6回ユースアジア選手権に際し、全日本男子ユース選手団の団長としてチームに帯同させていただき、無事3位入賞を果たし、来年、ロシアで開催の男子ユース世界選手権に出場できることになりました。日本ハンドボール協会、各選手所属高校、大学をはじめ、男子ユース代表をご支援いただいた関係各位の皆様に、心より感謝申し上げます。

今回のユースアジア予選は、前回成し遂げた初の予選突破を受け、連続出場を果たさなければならないという覚悟での大会となりました。ただ前回の準備期間からすると、今年度のチームに与えられた期間は短く、本年度4月からのスタートとなっていたため、内記監督をはじめ北林・大城両コーチが一つ一つの合宿を段階的に組み立て、高校の大会の合間を利用しながらチームづくりを進めていくという流れでした。

大会前の国内合宿における大崎電気やトヨタ車体、それから全日本ジュニア代表やブラジルユース代表とのテストマッチなどにおいても、粘り強くプレーすることができず、チームの成熟度としては多少不安が残る中、大会会場であるヨルダン・アンマン市への出発となりました。

私自身2度目のヨルダン大会でありました。国際試合としては十分とはいえない環境ではありましたが、宿舎や食事など前回ほどの不自由さを感じず、ある程度快適に過ごせる状態であることに一安心しました。また試合時間や練習時間の急な変更や、シリアの出場辞退など、タイムスケジュールに多少振り回される状態でありましたが、内記監督を始め北林コーチ、大岡トレーナー、通訳も兼ねていただいた大西ドクターの迅速な対応と、チームガイドの献身的な働きや、ヨルダン協会との連絡調整により何とか日程をこなしていけました。

大会前のトレーニングマッチとしてバーレーンユース代表とヨルダンナショナルチームとの2戦を戦いました。バーレーンユース代表には僅差で敗れ、ヨルダンナショナルチームには競り勝つことができましたが、私から見てこの2戦が選手たちの気持ちに火をつけることになり、アジア選手権の戦い方なども含めて、チームが大きく前進したことが実感できる内容でありました。

本番の大会を前に、日本代表の使命として「アジアチャンピオン」になることを改めて目標として掲げ、予選Bリーグの試合が始まりました。イラクとヨルダンには緊張しながらも自力を発揮し、大差で勝利することができました。

そして同じBリーグの最終戦韓国戦では、前半3点差で折り返すことができ、歴史を塗り替えるチャンスが来たと思われたのですが、逆に3点差で敗れてしまいました。大きく力の差を感じる内容ではありませんでしたが、追い込まれた時の精神的な差を感じる内容でありました。

そこで決勝トーナメントを前に、Aリーグ1位のカタールに勝利し、決勝で再び韓国に挑もうと誓い、準決勝へ向かいました。スペインやエジプトからの帰化選手を中心とする大型の選手に対して、ディフェンスにおいて手足が動き自由に攻めさせず、前半2点リードで折り返すことができました。韓国戦と同じ内容にしないとして後半に挑んだのですが、開き直って思い切り打ち込んでくるロングシュートや、強引なカットインに押し込まれ、攻撃ミスから相手に走られ6点差で敗れてしまい、これも逆転負けでありました。本気で韓国やカタールに勝利し「アジアチャンピオン」になることを考えていたスタッフや選手たちにとってこの敗戦のショックは大きいようでした。さらに、もう一つの準決勝では、3位決定戦で対戦することになったバーレーンが、韓国を追い詰めるほどの延長戦を戦いました。そのことから、テストマッチでバーレーンに敗れている日本としては、戦術面というよりは精神的に不安材料が残る、準決勝の終わり方になりました。

しかし、世界選手権への出場を諦めないスタッフがまず一丸となり、内記監督のバーレーンを想定した的確なゲームプランと、それに向けての入念なミーティングとトレーニング内容。北林コーチの朝の調整からトレーニングにおける、戦術に即した動きづくりと前向きな気持ちづくり。大岡トレーナーの献身的な心身のケアと日程の調整。大西ドクターの食事面や体のケアに対する適切な指示。このようなアプローチが選手一人一人

に伝わり、安倍主将を中心とする選手達でのミーティングがこれまで以上深まり、前回のアジアユースで世界への扉を開いた先輩達に続くんだというかたちで、全員の気持ちが一丸となって3位決定戦バーレーン戦への準備が整っていったように思います。

3位決定戦バーレーン戦では、前半から選手達の気持ちに凄まじいものがありました。無駄な失点やイージーなオフェンスミスがあっても気持ちを切らさず、高い闘争心と集中力を持って戦い、前半7点差で折り返しました。後半もレフェリーのジャッジにも動揺を見せず、相手に流れが行きそうになってもゴールキーパーが7mTを止めてくれたり、1人退場の状態でも守り抜き得点に繋げたり、終わってみれば31対23の8点差で、世界選手権の出場を勝ち取ってくれました。団長として大変誇らしく、選手たちにたくましさを感じることのできる試合でした。

大会運営に関しましては、代表者会議などAHF管理のもと通常通り行われていました。しかし大会本部があるようで、誰が責任者なのか判らない状態ですし、パンフレットも作成されていない状態でしたので、いろんなことを訪ねたくても頼るのはチームガイドしかいませんでした。タイムスケジュールの急な変更に振り回されたり、移動手段のバスが遅れて来たりと、通常なら考えられない事も多々ありました。

また競技運営に関しても、ユニフォームを間違えたチームに対してなんの制裁もなかったり、明らかに危険行為とみられるプレーや、ルールや競技規則に適応しない行為に対する指導もなかったりと、不可解なのも多いのも現状であります。

しかし選手やスタッフはこれも一つの環境だと受けとめ、食事が合わず体調を崩す選手もいたりする厳しい状況の中、一丸



となってプレッシャーに打ち勝ち、世界選手権への扉を開いてくれました。選手達はもとより、またそれを支え導いていただいたスタッフに心から敬意を表します。

ただ同じような状況の中、韓国はさらに上のたくましい精神力や一体感を発揮し、決勝でカタールを破り優勝しました。

東京オリンピックに向けての強化が問われる中、今回の結果を日本ハンドボール界のプラス材料に繋げなければならないと思います。そしてその積み重ねが、日本ハンドボール界の目指す「アジアチャンピオン」への定着になり、韓国を抜いて常にオリンピック出場できる競技力をつけてほしいと思います。

次は来年の世界選手権において、アジアの出場国の中で一番の輝きを放ち、世界へ日本をアピールできるように、さらなる強化をお願いいたしたいと思います。

最後になりましたが、今大会の出場機会を与えていただいた方々をはじめ、練習の対応をしていただいた大崎電気やトヨタ車体や全日本ジュニア代表の皆様、大会前の準備から大会後までさまざまなサポートをいただいた、日本ハンドボール協会事務局の皆様に心より感謝申し上げ、今回の報告とさせていただきます。

強化における成果報告

U-19男子日本代表監督　内記　徹

はじめにU-19男子日本代表の活動に対し、日本協会の関係者をはじめ、選手を派遣して頂いた所属チームの先生方やご家族の皆様には、多大なご理解とご協力を賜りまして心から感謝申し上げます。また、チーム結成当初から何度も胸を貸して頂いた実業団チームの方々や大会期間中に熱い激励を下さったハンドボール関係者の皆様、本当にありがとうございました。お陰様で、9月5日からヨルダン・アンマンで行われた第6回ユースアジア選手権において銅メダルを獲得し、来年8月にロシアで開催される世界ユース選手権への出場権を獲得することができました。

今年4月にチームを結成しましたが、今思えばアッと言う間の半年間でした。前回大会のチームは、アジア選手権まで1年半の準備期間があり、徹底した体力トレーニングとアジアを勝ち抜く戦術を選手に植え付ける事ができました。私もコーチとして参加した前回のアジア選手権は、中東の不慣れな生活環境と少しも気を抜けない試合が続き、とても過酷だったことを記憶しています。その事を思い起こせば、今回のアジア選手権は非常に厳しい準備日程だと考えていました。

3月に愛知県豊田市で行われた全国選抜大会で、山口修氏(男子日本代表コーチ)と大城章氏(男子世界学生選手権代表監督)にお手伝い頂き選手視察を行いました。アンダーカテゴリーの現状では、ナショナルトレーニングシステムやジュニアアカデミー、U-16の選手強化が一本化しており、悩み多い選手選考ですが多くの関係者の御協力で短期間でスムーズに進めさせて頂きました。また、日韓中ジュニア交流競技会の選手選考においても、全国高体連ハンドボール専門部の先生方にも多大なご配慮を頂き、本当に感謝致しております。

私自身男子ユースの代表監督を初めて務めさせて頂き、大きく2つの柱で大会の準備を含めた強化を行いました。1つ目は、前回大会において近森克彦団長をはじめとする滝川一徳監督、山口修コーチ、飯田純一郎トレーナーが、「熱い思いでこじ開けた世界の扉を絶対に閉ざすな!」というテーマで指導しました。4月に行われた第1回強化合宿では、前監督の滝川一徳氏を招聘し、「アジアで勝ち抜くために必要なこと」を講義して頂きました。選手の多くはU-16からの代表選手ですが、体格の大きい中東の選手と対戦することは初めての経験であり、日本人選手の良さや外国人選手に通用することと通用しないこと等を、映像を使って詳しく説明して頂きました。また、今まで



のユース・ジュニアの歴史から日本代表選手としての自覚や考え方、あるべき姿も指導して頂きました。選手は国内大会との戦い方の違いや国際大会の厳しさに驚きを示していましたが、日本代表としての熱い魂を引き継ぐことができました。また、近森克彦前団長からも合宿の度に温かく激励して頂き、アジアを勝ち抜く励みになりました。代表監督が代わればチームの考え方やスタイルが大きく変化するのではなく、一貫した考え方の中で前回大会の良いところを生かし上手くいなかったところを修正することができたと思っています。今回のアジア選手権を通じても、韓国・カタールの格上チームに前半リードを奪い終盤まで接戦に持ち込んだ事や、負けが続いた時にも考え方を崩さず日本らしい戦い方を最後まで貫き通すことで勝機を見出すことができたと思っています。

2つ目は、短期間の準備期間でしたが良い選手を集めて試合をさせるのではなく、「日本代表として戦う集団を作ってアジア選手権に臨む！」ということを念頭に置いて指導しました。キャプテンの安倍竜之介はジュニア代表と掛け持ちしていた関係でほとんど強化合宿に参加できませんでした。また、インターハイ予選や定期考査で強化合宿をやむをえず欠席する選手がいる中で、技術指導とチーム作りを短期間で並行して行いました。代表チームという不慣れな環境の中で、自分自身をさらけ出し率先して厳しい練習に取り組む姿勢を伝え続けましたが、実業団チームとの練習試合の中で誰もリーダーシップを発揮しない状況に、協会関係者から覇気がないと叱咤激励を頂くこともありました。豊富な経験と高い技術指導に定評がある北林健治コーチには、チーム作りから試合戦術まで多くのことに尽力して頂きました。練習の成果が出ないことを選手のせいにせず、選手にあった練習内容に変更したり、選手一人一人に声をかけ選手の将来性を見据えた指導をしたりして頂きました。また、お忙しい中アジア選手権に帯同して頂いた大西信三ドクターと大岡恒雄トレーナーにも、選手のコンディション管理は勿論のこと慣れない地での精神的ストレスを選手の気持ちになってアドバイスして頂きました。「絶対ロシアに行くぞ！」と苦しい時こそ適切なアドバイスとユーモアのある言動でチームを導いて頂いた、志々場修二団長のもと、選手、スタッフともに最後は真の「Team Japan」になれたと思っています。

今回参加した選手たちは、2020年の東京オリンピックに何かしら関わる年代だと思っています。また、来年のユース世界選手権も非常に楽しみで仕方がありません。今回ともに戦い抜いた選手は、真面目な努力家でハンドボールが大好きな金の卵たちです。世界は決して甘いものでは無いことは解っていますが、この選手たちと応援して下さる方々と共に日本ハンドボールの明るい未来に向けて、今後も一層頑張って行きたいと思います。

大会報告

U-19 男子日本代表キャプテン　安倍 竜之介

大会は9カ国が参加し、2つの組に分かれて予選を行いました。予選2位までが決勝ラウンドに進み、3位までが翌年のユース世界選手権の出場権が与えられます。日本は韓国、イラク、ヨルダンと同じB組に入りました。慣れない異国で長期間に渡る厳しい試合が予想されましたが、私たちは、前回達成した世界選手権初出場のプレッシャーに負けないよう「アジア大陸の王者になる」という高い目標を掲げて大会に臨みました。

大会直前にまずバーレーンとトレーニングマッチを行い、27対28で敗れたものの、中東選手独特のプレースタイルや、レフェリングなどを肌で感じ、全員で「いける」という感覚を掴みました。さらに地元ヨルダンのナショナルチームと対戦し29対28で勝利し、自信を持って大会に入ることができました。

大会では初戦のイラク戦が32対22で、第2戦のヨルダン戦も38対11で勝利することが出来ました。しかし満を持して臨んだ予選最後の韓国戦ですが、前半を3点リードしながらも後半、逆転を許してしまい33対36で敗れました。続く準決勝では、優勝候補のカタールと戦い、こちらも前半戦を2点リードで折り返しながらも終盤に逆転され19対26で敗れる結果となりました。戦術もさることながら、体力、気力、走力を含んだ総合的なレベルアップの必要性を痛感しました。

そして大会最終日。バーレーンとの3位決定戦に臨みました。全員で最初から気持ちをトップギアに入れ、何が何でも世界選手権の切符はもぎ取る覚悟で激しく、粘り強く戦いました。前半7点リードを奪い、後半猛追にあいましたが31対23で勝利することが出来ました。

大陸王者の目標には届きませんでしたが、何とか2回連続世界選手権出場の責任を果たすことが出来て、閉会式では皆でわき上がる喜びを爆発させ、お互いを讃えあうことが出来ました。これもひとえに、ご指導して下さいました志々場団長、内記監督、北林コーチ、大西ドクター、大岡トレーナーはもとより、協会関係者の皆様、日本からずっと熱い応援を送って下さった方々のお陰だと思います。本当にありがとうございました。



戦　評

■予選リーグＢグループ１戦目：９月６日（土）
日本　32（15－14，17－8）22　イラク

前半立ち上がりは、攻撃の主軸であるキャプテン安倍のロングシュートと伊舎堂のキレのあるフェイントシュートでスタートした。イラクは情報と違って体格を生かしたパワフルな攻撃よりも、ボールを巧みに回して粘り強く攻めるチームであった。日本は手・足を動かした攻撃的な6-0ディフェンスでスタートしたが、タイミング良く切られたポストプレーや外角からのミドルシュートで失点した。その後、ディフェンスリズムを作って速攻を仕掛けたが、伊舎堂の首にかかるカットインシュートが流されて逆速攻に持ち込まれるなど不運が続いた。そこで、機動力を生かしクイックスタートを仕掛けるがミスが続き、前半13分４対８とリードを許した。しかし、タイムアウト後から伊舎堂の思い切りの良いミドルシュートが決まり、野村の絶妙なポストパスカットからの速攻などで得点につなげ、ゲームの主導権を取り戻した。その後、お互いに退場者を出すものの安平の逆スピンシュートや牧野のカットインシュートで前半を15対14で折り返した。

後半はゴールキーパー袰屋を中心に山田・小澤・康本らでディフェンスが安定し、連続失点を許さなかった。攻撃面でもサイド入谷・安平の技ありシュートや野村・小澤のスピードある速攻で得点を重ねた。また、練習で徹底してきたボールをもらう前の動きが連動し、コンビネーション攻撃から清家のステップシュートが豪快に炸裂し、勝負を決めた。山田・高橋が体を張ったプレーで獲得した7mTを確実に大谷が決めるなどチーム一丸となってものにした初戦であった。

［個人得点］伊舎堂：７点、牧野：５点、安倍：４点、安平・大谷：３点、野村・清家・入谷：２点、康本・田里・小澤・山田：１点

■予選リーグＢグループ２戦目：９月10日（水）
日本　38（20－3，18－8）11　ヨルダン

前半日本は、安倍・山田・大谷・野村で中央を厚く守るディフェンスでスタートした。相手の100㎏を超えるポストプレーヤーをいかに守るかが課題であったが、ボールへの積極的な駆け引きとポストを前に置かない戦術が機能し、立ち上がりから８連続得点をあげた。攻撃ではサイド・ポストでの得点力不足が課題であったが、田里・牧野らでチャンスをつくり、野村・大谷で着実に得点を重ねた。苛立ち始めたヨルダンは、野村のサイドシュートに肘で首に当たりにいくなど、大怪我寸前のプレーが続出した。当然レットガードの判定ではあったが、一試合を通してシュート時に後ろから引っ張る、引っ掛けるなど、危険に満ちたゲームであった。選手は次戦の韓国戦を想定し、相手の攻撃に落ち着いて対応しチームがやるべきことを徹底した。

後半は、入谷・高橋・小澤・康本らでボールを中心にしたプレスディフェンスに切り替え、ゴールキーパー仲村の好送球で得点を量産した。目標の26点差以上を達成したが、シュート精度などの課題が残る試合であった。

［個人得点］牧野・入谷：6点、安平・小澤：5点、大谷：4点、康本・野村：３点、伊舎堂：２点、安倍・高橋・田里・山田：１点

■予選リーグＢグループ３戦目：９月11日（木）
日本　33（18－15，15－21）36　韓国

前半立ち上がりは、韓国の切れ味鋭いフェイントに、正確な方向付けとカバーを徹底した組織的な6-0ディフェンスで対応した。１対１からのトリックプレーに引っ掛かる場面もあったが、中央を強く壁を作ってシュートをうまく打たせ、GK袰屋の好セーブを連発させた。攻撃では韓国の3-3ディフェンスに安倍・伊舎堂の両フローターが果敢に１対１を仕掛け、相手の警告退場を誘った。先に主導権を握った日本は、数的有利な状況から積極的にボールカットを狙ってミスを誘い、入谷・小澤の連続速攻で13分10対６とリードした。その後日本の軽微なプッシングを連続して退場にされ、20分12対12の同点にされた。韓国は4-2や6-0など、ディフェンスシステムに変化をつけて守りにきたが、引いたところを大谷・伊舎堂が豪快に上から打ち込み前半を18対15の３点リードで折り返した。

後半はパワープレーのチャンスでスタートしたが、代わって入った韓国のゴールキーパーに連続して好セーブに遭い、一気に同点に追いつかれた。その後日本も韓国も選手を代えながら激しい攻防が続いたが、20分過ぎから韓国サウスポー７番の力強い１対１と的確なコンビネーションで失点を重ねリードを許した。森脇の好セーブや安倍の強引な突破等で最後まで必死に追いすがったが、一歩及ばなかった。

［個人得点］伊舎堂：８点、安倍：７点、大谷・入谷：４点、田里・小澤・牧野：３点、山田：１点

■準決勝：９月13日（土）
日本　19（13－11，６－15）26　カタール

決勝トーナメント準決勝は、ベンチ入りメンバー16人中15人が帰化選手で揃えるカタールと対戦した。日本は今までの実績からポスト・サイド・カットインを許さない密集した6-0ディフェンスでカタールに挑んだ。前半立ち上がりは、入谷・山田・康本・安倍・小澤らでエリア際を固め、相手のポストプレーに必死に対応した。不運にも相手のミスプレーやリバウンドボールをポストに拾われ得点されたが、徐々に相手のプレーを読んでボールを獲得し、伊舎堂・康本・小澤らの速攻で得点した。オフェンスでは、大型選手に対し速いボール回しと空いたスペースにポストを走らせチャンスを作り、田里の絶妙なコンビネーションで得点した。狙い通りの展開が続き、前半20分までに８対４とリードを奪った。その後、相手の力強いロングシュートを立て続けて打ち込まれたが、牧野のシュートフェイントからのカットインや安倍の中央からのステップシュートが決まり、前半を13対11で折り返した。

後半もポストを中心に間を割らせないディフェンスを徹底し、仲村・袰屋の好セーブから入谷・大谷の得点につないだ。田里・伊舎堂が負傷退場する中、メンバーを動かしながら、後半20分まで一進一退の攻防が続いた。その後、ディフェンスを中心にゲームを粘り強く進めたが、10mでコンタクトしたロングシュートや２人がかりで守りにいったプレーが押し込まれ連続失点を許した。焦って攻撃したシュートも枠をとらえきれず、19対26で敗れた。

［個人得点］伊舎堂・牧野：４点、安倍・康本：３点、田里：２点、大谷・小澤・入谷：１点

■３位決定戦：９月15日（月）
日本　31（16－9，15－14）23　バーレーン

前半はバーレーンの強引な１対１からアウトカットインを狙う攻撃を、低い姿勢で外に押し出す6-0ディフェンスで応戦した。トレーニングマッチでは手が首にかかったりカバーが遅れたりという反省から、山田・安倍・小澤を中心に集中して丁寧に対応した。硬さが見られた立ち上がりであったが、前半10分過ぎから徐々にペースを掴み、伊舎堂・山田の速攻等で得点をあげた。その後、退場者を出すものの練習通りの大きなクロスプレーを繰り返し、康本・入谷が的確に判断して得点を重ね、15分過ぎで９対３とリードを奪った。攻撃ではバーレーンのハーフマンツーで動くトップディフェンスにリズムを狂わせられたが、牧野の積極的な１対１と狙い通りのサイド攻撃が決まり、前半を16対９で折り返した。

後半は、お互いに守り合いの展開が続き、守ったと思ったプレーがフリースローに戻されたり、早いタイミングでのオーバーステップやチャージングの笛を吹かれたりと我慢の時間帯が続いた。セーフティーリードが奪えず、弱気になったところを連続して７mTCを与えたが、後半から登場したGK森脇が思い切った駆け引きで連続してシャットアウトし、後半の悪い流れを断ち切った。終盤バーレーンは積極的なプレスディフェンスを仕掛けてきたが、小澤・安平らで足を止めず動き続け得点を重ねた。安倍・伊舎堂の両エースも的確に時間を計算しながらチャンスメイクに徹し、ベンチ入りのメンバーも声を嗄らしながら最後まで仲間を盛り上げ31対23で勝利をものにした。

［個人得点］牧野：８点、入谷：５点、安倍・小澤：４点、山田：３点、伊舎堂・安平・大谷：２点、康本：１点

第43回全国中学校ハンドボール大会

開催期日：平成26年8月17日～20日
会　　場：愛媛県武道館、愛媛県総合運動公園体育館、松山市総合コミュニティセンター体育館、しおさい公園伊予市民体育館

■最終順位

［男子］
優勝：京田辺市立培良中学校（京都府）
準優勝：東久留米市立西中学校（東京都）
３　位：福岡市立多々良中央中学校（福岡県）・岩国市立平田中学校（山口県）
［女子］
優勝：浦添市立港川中学校（沖縄県）
準優勝：浦添市立神森中学校（沖縄県）
３　位：岩国市立平田中学校（山口県）・倉敷市立下津井中学校（岡山県）

■優秀選手

［男子］
山本孝樹　培良中（京都府）
千葉海斗　培良中（京都府）
坂本好誠　培良中（京都府）
藤田龍雅　東久留米西中（東京都）
大畠洋斗　東久留米西中（東京都）
部井久アダム勇樹　多々良中央中（福岡県）
藤川翔大　平田中（山口県）

［女子］
金城ありさ　港川中（沖縄県）
真座あすか　港川中（沖縄県）
伊波優里　港川中（沖縄県）
下地真央　神森中（沖縄県）
東江華奈　神森中（沖縄県）
竹垣果奈　下津井中（岡山県）
横田希歩　平田中（山口県）

第43回全国中学校ハンドボール大会回顧

第43回全国中学校ハンドボール大会実行委員会　**堀内 佐波**

前回の四国ブロック全中大会が終わってから、次のハンドボールは平成29年度の国体を見据えて、ぜひ愛媛県で！とブロック長をさせていただくことになりました。東北ブロックの福島大会を機に、各ブロックで開催される大会に競技役員として参加しながら、こんなにすばらしい大会を無事愛媛県で開催できるのか…という不安が開催年度が近付くにつれ、徐々に大きくなっていきました。まずは会場。この時点では、愛媛県で空調が効き、ハンドボールを開催できる体育館がありませんでした。真夏の酷暑の中、選手たちに最高のパフォーマンスを発揮してもらうためには、何が何でも空調の効く、最高の環境で迎えたいという思いがありました。国体へ向けての施設の改修や、会場との交渉の末、4会場4面運営という、今までにない開催計画を立てることになりました。次は、競技役員です。愛媛県は中学校ハンドボール部、男子２校、女子３校のみです。当然のことながら、オフィシャル等を専門にできる生徒役員が足りません。この全国大会開催に向けて、愛媛県の高校生ハンドボーラーたちが、中学校の県・四国総体から何度もオフィシャルを行ってくれ、各会場のコート設営まで、きめ細やかに活動し協力してくれました。ただでさえ、人数が足りない中、今回の４会場４面運営は、高校生、愛媛県ハンドボール協会、そして愛媛県高体連の皆様の献身的な支えがなければできるものではありませんでした。愛媛県内のハンドボールに携わる方々の、「この大会が国体につながるんだ、この選手達が、３年後、また愛媛国体で活躍してくれるのだ」という熱い思いが本当にありがたく、その思いに応えるような大会にしなければと思いました。

いろいろな方々に支えられながら、８月17日、第43回全国中学校ハンドボール大会が開催となりました。愛媛県武道館で開会式が行われましたが、会場、式典、受付接待など、競技以外の役員は、皆ハンドボールとは関係のない方々でした。そんな中、開会式のプラカード保持者たちのすばらしい行進のもと、各代表選手たちが堂々と爽やかに入場し、「本当に始められたんだ」と胸が熱くなる思いがしました。その後も、各会場から、「駐車場係の生徒がすごく爽やかで試合前から感動をいただきました」「トイレがいつでもスリッパが揃っていて、洗面台もきれいで…生徒役員が丁寧に直してくれていて驚きました」など、お褒めの言葉をいただきました。これも、ハンドボール競技の役員として参加してくださった先生方や、生徒の皆さんの、「一緒にすばらしい大会にしていこう、全国から来県のチームを気持ちよく接待しよう」という思いの表れだと思っています。運営に携わってくださった地元役員の皆様に対して、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、県武道館・伊予市民体育館は女子会場、県総合運動公園・松山市総合コミュニティセンターは男子会場、４会場４面運営ということで、宿泊や移動にはたいへんご不便を掛けたことと思います。競技初日の18日は男女１・２回戦、各会場６試合ずつが行われました。男女とも延長戦や１点差の好ゲームが続き、白熱した初日となりました。「最高のパフォーマンスを」と会場を練った甲斐がありました。19日は３回戦と準決勝。愛媛県勢は、男女とも３回戦・ベスト８に残ることができました。男子は県勢初のベスト８です。大会運営を支えてくれ、応援してくれていた皆様に恩返しができたとの思いでいっぱいです。そして最終日決勝。女子は沖縄県勢同士の決勝を浦添市立港川中学校が、男子は京都府勢として初、京田辺市立培良中学校が制しました。共に初優勝を成し遂げ、新たな歴史を刻み、４日間の幕を閉じました。

最後になりましたが、今大会を開催するにあたりご尽力頂きました（公財）日本ハンドボール協会、（公財）日本中体連、愛媛県ハンドボール協会、愛媛県中体連、開催各地区、そして協賛各位に改めて厚くお礼を申し上げます。そして次年度、東北で開催される岩手県大会の成功と東北地方の１日も早い復興を祈念して、今大会の回顧とさせて頂きます。本当にありがとうございました。



男子優勝：京田辺市立培良中学校（京都府）

培良中学校ハンドボール部監督　平舘 一馬

はじめに、第43回全国中学校ハンドボール大会を開催するにあたり、ご尽力頂きました（公財）日本中学校体育連盟をはじめ（公財）日本ハンドボール協会、愛媛県ハンドボール協会、ならびに関係各位の皆様に改めて心より厚く御礼申し上げます。

この度、第43回全国中学校ハンドボール大会において優勝を果たすことができました。これも日頃から培良中学校ハンドボール部を支えて下さっている保護者の方々や、練習に参加し力になってくれたOB・OG、指導者として未熟な自分に助言や指導をしていただいた先生方など、多くの協力があったからこそ得られた結果だと実感しています。また、「目標に向かって目の前の事を全力でやり切る！」この事を胸に練習に取り組んできた選手たちの努力の賜物です。

今年のチームは、小学校から全国大会を経験している選手が多く、練習内容の吸収も早いチームでした。そうして迎えた春の全国大会でしたが、個々の能力は高いものの、チームとしての力不足から思ったような試合ができずに、選手たちも納得のできない結果になってしまいました。そこからは、チーム全体の歯車が上手く回らない状態が続きました。その後は、良いことも悪いことも選手たちとコミュニケーションをとり、生徒の考えと自分の考えをすり合わせてハンドボールを作っていくことに専念し、選手たちの力が発揮できる環境を作っていきました。

今大会を振り返ると、初戦の菰野中学校戦で、スピードに乗った攻撃や前を見ての状況判断など、今まで練習でやってきたことがスムーズにでき、それがチームに良いリズムを与えたように思います。そうして大会期間中にもチームがどんどん成長していきました。最後まで目の前のハンドボールに集中できたことが今回の結果につながったと感じています。また決勝戦では、京都から駆けつけて下さった皆様の応援や、2回戦で戦った地元の椿中学校の力強い応援が選手たちの後押しになりチーム一同感謝しています。色々な人に支えられての結果だということを胸に、驕らず日々努力を積み重ねていこうと思います。

培良中学校ハンドボール部主将　千葉 海斗

僕たちは「一意専心」ということをテーマに日々の練習を全力で取り組んできました。その甲斐があって今回の全国大会では優勝することができました。

全国大会ではどの対戦相手もすごく強く、気持ちで負けないように一戦一戦を大事に戦っていました。その中でも僕たちが優勝できたのは、チームの団結力や、「絶対に優勝する！」という強い気持ちを最後まで持ち続けることができたからだと思います。チームの団結力が一段と強くなったのは、春の全国大会で明倫中学校に負けてからです。チーム全体に、負けることの悔しさが共有できたからこそ、全員が「負けたくない！」という強い気持ちを持つようになったのだと思います。それからの全国大会までの期間は「絶対に負けたくない！」という気持ちを常に持つようにしました。日々の練習ではどんな相手にも通用するような攻め方や、どんなに大きくて力の強い相手にも点を取られない守備などを必死に考え取り組んできました。そういった努力を積み重ねてきたことで、今回の全国大会に自信を持って臨むことができ、優勝という栄冠を手にすることができたのだと思います。

最後に、今回の全国大会に出場し結果を残せたのも、ハンドボールができているのも、家族や指導して下さった先生方のおかげです。また、僕たちを陰で支えてくれた大勢の皆様にも感謝の気持ちを忘れずにこれからも頑張っていきます。今まで応援してくださり本当にありがとうございました。



写真提供：スポーツイベント社



写真提供：スポーツイベント社

女子優勝：浦添市立港川中学校（沖縄県）

港川中学校ハンドボール部監督　神谷 加代子

子ども達と追い求めてきた「全国制覇」を成し遂げた瞬間、思わず体育館の天を仰ぎ、「全ての方に感謝」とつぶやき、そして「ありがとう」と頭を下げ、共に力を合わせたスタッフと握手をしている自分がいました。

日本一を目指した長い道のりの中には、多くの方々の支えがありました。沖縄県はハンドボールの競技力が高く、特に浦添市においては小学校のジュニア世代からハンドボール愛好者が多い中、切磋琢磨しレベルの向上を図り、実績を上げています。中学校においては競技チームが多く、ライバル同士でお互いの力を高め合っています。また、島国である沖縄県では、競技力向上のための他県遠征等を行うことがなかなかできません。このような中、多くの高校生の胸を借り、何度も練習試合を行うことによって子ども達のレベルを上げてきました。そういった環境の中での今回の「優勝」は沖縄県のハンドボール競技力の結集だと思っています。

港川中学校に赴任し子ども達に徹底したことは、ハンドボールを頑張ることは当たり前、それ以外の学校生活や家庭生活において、あいさつや時間を守る、聞く態度、返事、清掃等の基本的生活習慣の確立でした。また、練習においては、各個人の課題やチームの課題を明確にし、その課題解決の為にどうしなければならないのかを子ども達に常に問いかけ続けました。

チームにとっては、春の全国中学生ハンドボール大会において、準決勝で負けた時が転機だったと思います。主将の真座あすかを中心に、子ども達は練習試合や公式試合を重ねるたびに「考える力」が育ち、強くなっていくのを感じました。自分達の試合展開ができない時に、チームの本当の力が問われることを念頭に置き、日々の練習に怠ることなく自分達の目標達成に向け、邁進し続けました。その姿を見た時に、ハンドボールを指導して良かったと思えた瞬間でもありました。しかし、やる気のある選手、情熱のある指導者だけでは日本一のチームを成し遂げることはできません。そこに愛情をいっぱい注ぐ保護者の力が不可欠だと考えています。いつもそばにいる家族の言葉が子ども達の支えとなり、持てる力を発揮することができます。我が子の頑張っている姿を見て励ます保護者の言葉かけが、指導者以上に力があると思っています。

最後になりますが、第 43 回全国中学校体育大会の開催にご尽力頂いた愛媛県ハンドボール専門部の方々をはじめ関係機関、関係各位の皆様に改めて厚くお礼申し上げます。また、愛媛県で多くの厚いエールも頂きました。そのエールが子ども達の励みになりました。「感謝」以外の言葉がみつかりません。最高の舞台で最高のプレーができ、日本一になった子ども達と共にこれからも「日々努力」「日々反省」「日々感謝」の気持ちを忘れずに精進していきたいと思います。

港川中学校ハンドボール部主将　真座 あすか

私たち、港川中女子ハンドボール部は「全国制覇」を目標に日々の練習に励んで来ました。また、「コートの外に勝負


写真提供：スポーツイベント社

あり」のことば通りにコートの中で頑張るのは当たり前、コートの外の普段の生活や学校生活で一生懸命に頑張れるチームが勝つという加代子先生の教えを元に、毎朝の20分間の学校の奉仕活動や挨拶運動などそして、当たり前のことが当たり前にできるように取り組んできました。

そして、初めて挑んだ春の全国大会。私たちは「上手くいけば優勝できるだろう」「優勝できたらいいな」と軽い気持ちで大会に臨んでいました。しかし、その気持ちが試合に出て準決勝で負けてしまいました。私たちは春の全国大会で多くのことを学ぶことができました。全国大会で勝ち進んで行くことの難しさや試合に臨む姿勢、また、相手にリードされた試合の時にそれを取り返すだけの強さがない自分達の弱さに気づかされました。「自分達の敵は自分自身」ということを知り、自分の弱さに負けたら全国制覇はできないとわかり、そこから私たちは自分自身と闘ってきました。

8月17日から全国大会が始まりました。地区予選、県予選、九州予選と全て決勝の相手は神森中学校。特に、九州予選では、第二延長の末、敗れ悔しい思いをし、それをバネに絶対に全国大会でリベンジすると挑んだ大会でした。

その全国大会の初戦の相手は東海ブロック１位の平針中学校でした。私達の武器である３・２・１ディフェンスを崩され苦戦し延長戦までもつれ大接戦でした、最後まであきらめずに戦い、やっと勝利することができました。自分たちのディフェンスシステムを修正し挑んだ準々決勝と準決勝も苦しい試合が続きましたが、一戦一戦、みんなで声を掛け合い、なんとか決勝まで進むことができました。決勝の相手は、神森中学校でした。とても緊張しましたが、絶対に負けたくない、九州大会のリベンジをすると心に誓い試合に臨みました。しかし、試合が始まると緊張からか体が硬くなり、なかなか自分のプレーができず前半を６対５と１点リードで折り返しました。ハーフタイムで、気持ちを切り替え、後半は自分達の持ち味であるディフェンスからリズムを作ることができ、その結果16対12で勝利し「全国制覇」を達成しました。

私達がここまでできたのは、私達をこれまで指導して下さった最高の先生方やいつも支え励ましてくれた最高の保護者、全国という最高の舞台で最後まで共に戦った最高のライバル、つらい時楽しい時を共に過ごした最高の仲間がいてくれたからだと思います。こんな恵まれた中でハンドボールができたことに感謝し、これからも、日々努力し頑張っていきたいと思います。

戦　評

男　子

■準決勝

東久留米西中　35（19－11，16－14）25　平田中

平田中のスローオフで試合開始。平田中３番大西がパスカットからの速攻で先制する。東久留米西中はテンポの速い試合開始から７番藤田や９番大畠のミドルシュートや５番村田のカットイン等で５点連取しリズムを作る。平田中も５番尾川を中心に攻撃を組み立てるが、東久留米西中のGK1番高橋の好セーブによりなかなか得点できない。７点差がついたところで平田中がタイムアウトをとり、11番森山のサイドシュートや３番大西の速攻からのポストシュートなどで得点するが、東久留米西中は７番藤田のミドルシュートやブラインドシュートなど多彩な攻撃で得点を重ねていく。20分、10点差になったところで平田中は２度目のタイムアウトをとる。４番藤川のミドルシュートでリズムを取り戻し、そこからの５分で５点を取り、追い上げを図るが、19対11、東久留米西中８点リードで前半を折り返した。

後半立ち上がり、東久留米西中７番藤田の退場の間、平田中２番村上の7mスローや４番藤川のミドルシュートが決まり、５点差まで追い上げるが、要所は東久留米西中１番高橋好きセーブ等で追撃を許さない。平田中は６番山崎の速攻や２番村上のカットイン、３番大西のポストシュート等で得点する一方、東久留米西中は７番藤田の多彩なシュートや９番大畠のミドルシュート等で得点する一進一退の攻防であったが、じりじりと点差を広げていった東久留米西中が35対25で勝利した。

培良中　32（14－12，18－8）20　多々良中央中

出場チーム中、最高身長の２番部井久を擁する多々良中央中と、同じく長身の２番木田と５番千葉のロングヒッターを擁する培良中との対決。前半立ち上がり、培良中は６番坂本のカットインシュートで先制すると、多々良中央中もすかさず６番大住のミドルシュートで応戦。10分過ぎまではシーソーゲームが続く。培良中は３番井上のサイドシュート、４番佐藤のポストシュート、２番木田のロングシュートなどで得点を重ね、多々良中央中は２番部井久の豪快なロングシュート、４番溝上のポストシュートなどで得点を重ね、一進一退の攻防が続いた。試合の流れが動いてきたのは15分、培良中は多々良中央中の得点源２番部井久にマンツーマンDFを仕掛け、多々良中央中の得点リズムが少しずつ悪くなる。前半14対12と培良中の２点リードで折り返す。

後半になっても２番部井久へのマークがきつく、得点が止まった多々良中央中に対して、培良中は６番坂本のステップシュート、５番千葉のミドルシュート、２番木田の速攻などで着実に得点を重ねた。多々良中央中も３番柴田を中心に果敢にシュートを狙うも、厚いシュートブロックや１番GK山本のナイスセーブに阻まれ、培良中の６番坂本にマンツーマンDFを仕掛けるも、時すでに遅く、32対20と大差がつき、培良中に軍配が上がった。

■決勝

培良中　34（14－12，20－17）29　東久留米西中

どちらが勝っても初優勝となる１戦で先手を取ったのは培良中。４番佐藤、９番小角が立て続けにシュートを決めて２対０とした。対する東久留米西中も７番藤田、11番白築が得点し、すぐさま同点に追いつくが、次にリズムをつかんだのは培良中だった。４分過ぎから６番坂本、４番佐藤、５番千葉が４連続で得点し、６対２と一気に突き放しにかかった。流れを変えたい東久留米西中はここでGKを16番河村にチェンジ。この交代が当たり、培良中のシュートを次々とシャットアウトする間に９番大畠のミドルや11番白築のサイドシュートでじりじりと追い上げ、15分７対６の１点差とした。その後は引き離したい培良中と追いつきたい東久留米西中が交互に



写真提供：スポーツイベント社

点を取り合う展開となり、最後に３番井上がサイドシュートを決めた培良中が 14 対 12 と２点リードして前半を終えた。

後半立ち上がり、東久留米西中７番藤田がミドルシュートを決め、１点差としたところで培良にアクシデントが発生。５番千葉が負傷出血で治療中は試合に出られない状況となった。この間に１点でも多く点が欲しい東久留米西中だが、退場者が出たこともあって思うようにチャンスを作れない。逆に培良中は交代で出場した 11 番山下がポストシュートを決めるなど要所で着実に得点し、９分には 21 対 17 と４点差をつけた。東久留米西中も９番大畠、５番村田が粘り強く得点するが、10 分、痛恨のファールで退場者を出してしまう。このチャンスを培良中は逃がさなかった。５番千葉が落ち着いて 7mT を決めると４番佐藤、２番木田、６番坂本が連続得点を挙げ、12 分で 25 対 18 とこの試合最大の７点差をつけた。その後は両チームとも点を取り合う展開となり、東久留米西中は７番藤田、11 番白築が得点を量産するものの、培良中も６番坂本、９番小角が落ち着いて加点し、点差をつめさせない。結局、終始落ち着いた試合運びを見せた培良中がセーフティーリードを保ち、34 対 29 で京都府勢としても初となるうれしい優勝を飾った。

女　子

■準決勝

神森中　21（16 − 12, 5 − 8）20　平田中

春の女王・平田中と九州予選１位・神森中との対戦。先手を取ったのは神森中。ポストの４番儀間が難しい体勢からシュートを決めて先制した。平田中もすぐさま４番村端のサイドシュートで追いつくと、続けて 7mT を２番横田が落ち着いて決めて逆転。さらにパスカットから７番今重が速攻を決めて３対１とリードを広げた。その後は一進一退の攻防となり、平田中が２番横田を中心に 10 番岡田のカットインや７番今重のポストシュートで加点すれば、神森中は５番東江がミドルやカットインで得点を量産。３番新里や２番藤森も着実にシュートを決めて、19 分で 12 対 11 とがっぷり四つの展開となった。試合が大きく動いたのは残り５分。平田中に退場者が出たこともあり、神森中は３番新里の連続シュートや 10 番宮里の速攻で怒涛の５連取。16 対 12 とし、神森中の４点リードで前半を折り返した。

後半もまず流れをつかんだのは神森中。17 番我那覇、３番新里が続けてシュートを決め、ここまでで最大の６点差をつけた。対する平田中も粘り強いディフェンスからチャンスをうかがうと、３番亀谷のカットインや７番今重の速攻などで４連取し、じりじりと追い上げていく。10 分過ぎには 10 番岡田の３連取もあり、15 分、ついに 20 対 20 の同点に追いついた。その後は両 GK のファインセーブもあり、両チームとも得点できない展開となる。ついに試合が動いたのは 21 分神森中の５番東江が豪快にミドルシュートを突き刺し 21 対 20 と再びリードを奪った。最後まであきらめない平田中もボールカットからの速攻で GK と１対１の場面を作るが、神森中の GK 下地がシャットアウトしてその瞬間試合終了のブザーが鳴った。両チームとも一歩もひかない好勝負は１点差で神森中が見事に勝利。

港川中　22（13 − 10, 9 − 7）17　下津井中

港川中は、素早いパス回しから 13 番伊波の鋭いカットインシュートで先制。下津井中も２番竹垣の豪快なミドルシュートですぐに同点に追いつく。港川中は、７番金城を中心にパスを回し、13 番伊波や５番上江洲が着実にシュートを決め、常に先行していく。３－２－1DF で相手の攻撃を封じ込めようとする港川中に対し、下津井中は巧みにポジションを変えながら守備陣形を崩そうと試み、３番山路麻愛や５番平松のカットインシュートで追い上げていく。１番 GK 渡邊が再三の好セーブで流れを引き戻した下津井中は、前半 16 分、８番坂本の速攻が決まり同点に追いつく。その後は一進一退の攻防が続くが、残り５分で退場者を出した下津井中に対し、港川中は７番金城のミドルシュートや６番真座のポストシュートで３連続得点し、13 対 10 と３点リードで前半を折り返した。

後半も港川中は攻撃の手を緩めず、２番大城のカットインシュートや７番金城のミドルシュートで得点を重ねていき、18 対 12 と６点差としたところで下津井中がタイムアウトをとる。下津井中は、１番 GK 渡邊ファインセーブで相手の攻撃の勢いを止め、２番竹垣や３番山路麻愛の鋭いシュートで終盤に３連続得点し、３点差まで追い上げる。しかし、港川中は２番大城のカットインシュートや 13 番伊波の速攻が決まり、流れを引き戻すと、１番 GK 城間のファインセーブで追加点を許さず、22 対 17 で勝利を収め、決勝戦に進出した。

■決勝

港川中　16（6 − 5, 10 − 7）12　神森中

混戦の今大会を勝ち上がってきたのは沖縄の２チーム。過去２回対戦し、県予選決勝では港川中が、そして九州予選決勝では神森中が勝利し、１勝１敗の五分で迎えた３度目の対戦は、全国大会決勝というこれ以上ない最高の舞台となった。先制したのは、港川中。３番銘苅がサイドシュートを落ち着いて決めた。しかし、その後は両チームとも相手を攻めあぐね、なかなか得点が生まれない。ようやく試合が動いたのは９分過ぎ、神森中の３番新里がカットインを決め１対１の同点とした。その後も両チームの堅い守りと GK のファインセーブもあり、なかなか点の入らない緊迫した展開となる。そんな中で神森中は３番新里、５番東江、７番安村がしぶとく得点。対する港川中も 13 番伊波、７番金城、６番真座が得点し、互いに一歩もひかないなか、前半唯一の連続得点を決めた港川中が６対５と１点リードして前半を折り返した。

後半、まず勢いをつかんだのは港川中。２番大城、５番上江洲、６番真座が立て続けにシュートを決め開始３分までに９対５と一気にリードを広げた。神森中も４分、10 番宮里がシュートを決めて１点を返すが、港川中は３番銘苅、７番金城が連続得点し、９分で 11 対６とここまで最大の５点差となった。何とか差をつめたい神森中は９番仲村のポストシュートを皮切りに 10 番宮里、７番安村、３番新里が連続得点し、15 分には 11 対 10 の１点差に詰め寄った。流れを変えたい港川中はここでタイムアウトを要求。これで落ち着きを取り戻した港川中は３番銘苅、13 番伊波が３連取し流れを引き戻す。必死に食い下がる神森中も２番藤森、３番新里が意地のシュートを決めるが、港川中は冷静にリードを保ち、ついに終了のブザーが鳴り響いた。沖縄同士の意地のぶつかり合いとなった決勝戦は、16 対 12 で港川中が勝利し、うれしい初優勝を遂げた。



写真提供：スポーツイベント社

PHOTO SNAP

第43回全国中学校ハンドボール大会



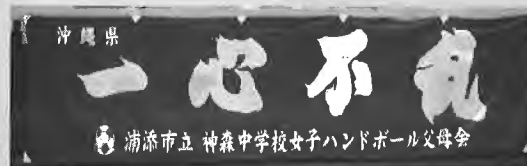
女子決勝審判：比留間・北島ペア



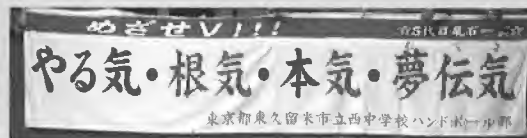
男子決勝審判：内海・堀川ペア



2017 年愛媛国体開催決定



女子準優勝：神森中学の応援旗



男子準優勝：東久留米西中学の応援旗



女子優勝：港川中学の応援旗



男子優勝：培良中学の応援旗



男子優勝の胴上げ



女子優勝の胴上げ



全国中学校体育大会のフラッグ

第41回
全国高等専門学校ハンドボール選手権大会



開催期日：平成26年8月18日、19日
会　　場：鳴門・大塚スポーツパーク　アミノバリューホール

[最終順位]
優　勝：徳山高専（中国地区）
準優勝：有明高専（九州沖縄地区）
３　位：津山高専（中国地区）・大阪府大高専（近畿地区）

優勝 徳山高専



徳山高専監督　池田 光優

はじめに、第49回全国高等専門学校体育大会・第41回全国高等専門学校ハンドボール選手権を開催するにあたりご尽力いただきました阿南高専の教職員の皆様をはじめ、（公財）日本ハンドボール協会、徳島県ハンドボール協会ならびに関係者各位の皆様に改めて心より厚く御礼申し上げます。

今年は、長らく本チームのエースであったセンターの池岡選手が最終学年という事もあり、昨年度達成した３連覇の上を行く４連覇を達成して有終の美を飾るつもりで日々練習してきました。これまでの経験から、今大会で自分たちが最後まで残るために必要な項目を洗い出し、練習メニューも含めて、選手達が自分たちでチームを構築してきました。ところが春に池岡選手が肘を痛め、しばらく練習に参加できない状態が続きました。普通のチームでは、ここで歯車が狂いだすのですが、今年のチームは良い意味で危機感が芽生え、日々の練習が充実したものとなりました。このためブロック大会では池岡選手だけでなく他の選手が多いに活躍してくれました。

大会では、予選リーグからきつい戦いが続く中、フローターの濵崎選手が右ひざのけがで戦線離脱し、戦いは非常に困難なものになりました。そんな中、穴を埋めてくれたのが４年生たちでした。４年生も同じ練習を続けてきてチームの一員となっていた事を深く感じました。

準決勝や決勝戦で対戦した大阪府立大高専や有明高専は、ロングシュートを多用してくるチームでしたが、ディフェンス能力の高さが今年度の強みの一つであったので、なんとか対応する事ができ、優勝を勝ち取る事ができました。

来年は、高等専門学校体育大会が第50回の記念大会として参加チームが増える事になります。エースの池岡選手は卒業しますが、新しいチームでまた、全国大会に出場できるようにがんばっていきたいと思います。どうもありがとうございました。

徳山高専主将　角村 将太

去年の全国高専が終わり、新チームが始動してから１年が経ちました。当時４年生だった僕たちはプレーでも精神面でも先輩方に頼ってばかりで、自分たちが最上級生になることに大きな不安を抱いていたのを覚えています。新チームになってからはとにかく超えるべき目標に向かって必死に練習に取り組んできました。その中でチームメイト、マネージャー、先生方、OB・OGの先輩方の存在に助けられて、この１年間はあっという間に過ぎていきました。

むかえた全国高専は予選リーグ初戦で右45°の選手が怪我を負い、かなり苦いスタートになりました。しかし、空いてしまった穴をカバーできるだけの組織力で予選リーグ、準決勝を突破し、有明高専との決勝戦では苦しい時間帯もありましたが自分たちに優位な形で試合を運ぶことができました。しかし、この１年間とにかくディフェンスの練習をメインに取り組んできたのですが、大会では機能していない面が多々あり、そこはかなり悔やまれるところではあります。

徳山高専４連覇の１番の功労者はエースの池岡選手で、練習や試合で技術的にも精神的にもチームを引っ張ってくれました。同時に、このチームはいい意味で個性が強く、１人１人の意識の高さはどこのチームにもないものだと僕は思っています。特に５年生は練習を盛り上げてくれたり、いろんな提案をしてくれたりと、本当に助けられましたし、マネージャーの働きにも支えられて、こんな自分でも最後までキャプテンをやってくることができました。それとともに、これまで練習に付き合ってくださった先輩方、地元のクラブチーム、選手の方々には本当にお世話になりました。たくさんの人たちの支援のもと、優勝という結果を残せたことにチーム一同、深く感謝しています。絶対的センター、点取り屋の両エース、ムードメーカーの両サイド、頼れるベンチメンバー、働き屋のマネージャー、監督、コーチ、最高のチームでした!!

総評 大会を振り返り

大会主管校（阿南高専ハンドボール部顧問） 松浦 史法

第49回全国高専体育大会（第41回全国高専ハンドボール選手権大会）は、四国地区阿南高専が主管校となり8月18・19日の2日間を通して実施しました。徳島県ハンドボール協会の多大なるご支援・ご協力のもと、鳴門・大塚スポーツパーク アミノバリューホールにて、無事開催することができました。

高等専門学校は、独立行政法人国立高等専門学校機構に所属する51校のほか公立3校、私立3校の合計57校あり、このうち、ハンドボール部登録チームは、男子43チーム・女子3チームあります。全国高専大会は、北海道・東北・関東信越・東海・北陸・近畿・中国・四国・九州沖縄の9地区でそれぞれ行われる地区大会を勝ち抜いた代表校11校に開催校の阿南を加えた12校で行われます。第1日目には、12校を4ブロックに分けて予選リーグが行われ、各ブロックの1位のチームが第2日目に行われる決勝トーナメントを戦います。予選リーグは25分ハーフで合計12試合行うため、コート2面を用いて実施しました。また、準決勝戦もコート2面を用いて同時に行いました。徳島県内にはいくつか体育館がありますが、それぞれ立地が離れており、異なる体育館で試合を行った場合、移動に時間がかかりチームへの負担が大きくなってしまいます。そこで、コート2面をとれる体育館を探すことにしました。今年度は同時期に全国中学校体育大会も四国地区で開催されることや、平成26年には県プロサッカークラブである徳島ヴォルティスが日本プロサッカーリーグでJ1へ昇格したこともあり、会場周辺は大変な混雑が予想されました。折しも8月に入り、台風12号ならびに11号が四国へ上陸し、総雨量が2000ミリを超える地域も出るなど大雨が続き、開催当日まで予断を許さない状態でした。幸い、大会期間中は天候に恵まれ、大きな事故やけが人もなく無事に全試合を終えられました。

予選リーグでは各ブロックとも白熱した試合展開となりました。リーグ戦の結果、大阪府立大学高専・徳山高専・津山高専・有明高専の4校が決勝トーナメントへ進出しました。準決勝戦は津山高専対有明高専および大阪府大高専対徳山高専の間で試合が行われました。両試合とも終始手に汗握る接戦を繰り広げましたが、とりわけ徳山高専のディフェンスの堅さが印象に残る展開で、徳山対有明で行われた決勝戦でもその勢いは止まらず、徳山高専の大会4連覇で幕を閉じました。来年度予定される第50回の記念大会では、熊本高専を主管校とし、代表校は16校に増やして開催される見通しとなっています。徳山高専はこの中で5連覇を目指すことになり、より熱く激しい戦いが繰り広げられることでしょう。なお、開催校である阿南高専は、無念ながら予選リーグで敗退し、全国高専大会の壁の厚さを実感する形となりました。

最後に、本大会の開催にあたり、徳島県で全国高専ハンドボール選手権大会をはじめて開催するという中、無数のご支援・ご協力を賜りました日本ハンドボール協会、佐藤公美理事長をはじめとする徳島県ハンドボール協会関係者各位ならびに会場の設営・オフィシャル・放送などでお世話になった城北高校・鳴門高校のハンドボール部および放送部の皆様に御礼申し上げ、大会の報告とさせていただきます。

戦評

■準決勝

有明高専　29（14－11、15－15）26　津山高専

津山高専スローオフで試合が始まり、両チームとも硬さが見える立ち上がりであったが、2分2秒に有明高専が先制。開始4分、同点時に津山高専に退場者が出、有明高専が流れをつかむかと思われたが、津山高専が粘りを見せ、互いに点を取り合う。開始14分32秒に有明高専に退場者を出したが、OF5人でも、PVを効率よく使い、得点を重ね、着実に3点のリードを作り、DFも1人少ない中で足を動かし、懸命に守っていた。一方、津山高専は、19分2秒にTOを取り、有明高専に傾きかけた流れを切り、開始後は3点を取り、同点とする。その後、有明高専は速攻で得点を重ね、前半終了時に3点リードとする。

後半に入り、両チーム共に退場者を出したが、点を取られれば、取る形となり、緊迫した試合が続く。津山高専も3番LBの難波を中心に点を重ねるが、有明高専のDFの足が止まらず、DFで作ったチャンスを速攻につなげ、後半11分に有明高専がこの日初めて5点をリードする。その後、有明高専は両サイドで点を取ると、13番CBの原口が相手のDFの間からブライドシュートで点を取り、リードを守ったまま試合時間が過ぎていく。後半20分に津山高専に退場者が出、万事休すかと思われたが、GKが必死にシュートを止め、ラスト1分で2点差とし、試合終了まで勝負が分からない展開であった。しかし、その後、得点を重ねることができず、29-26で有明高専が勝利した。両者とも印象に残る選手が多く、監督・役員・選手は大変であったと思うが、見ている側は最後まで楽しめる試合であった。

徳山高専　28（15－9、13－11）20　大阪府大高専

徳山高専スローオフで試合が始まり、徳山2番池岡がミドルシュートで先制。その後、大阪も14番横川のシュートで反撃し、5分過ぎまで一進一退の攻防を見せる。大阪は徳山2番にマンツーマンDFをこころみるが4連破され8分34秒にたまらずタイムアウトを取るが流れを変えることができず、徳山の堅いDFを崩せず、得点することができない。逆に徳山は多彩なOFで次々と得点を重ね、15-10で前半を終える。

後半、大阪は14番横川にマンツーマンをつかれるが、それをかいくぐり、じわじわと点差を縮め、8分30秒徳山がタイムアウトを取り流れを切ろうとこころみる。半ば、大阪は2人の退場者を出し、苦しい展開を強いられる。徳山は要所で得点を上げ、大阪の必死の迎撃を振り切り28-20で勝利し、決勝へと駒を進めた。

■決勝

徳山高専　31（16－10、15－14）24　有明高専

有明のスローオフで試合が始まり、先制は有明8番古賀のサイドシュートを皮切りに、2連続得点をあげる。一方徳山も2連続得点をし、序盤はほぼ互角の展開を見せる。その後、14分に徳山がこの試合初めて3点差をつけたところで有明がタイムアウトを取り、流れを呼び戻そうとするが、徳山の堅いDFに阻まれ得点を縮めることができず、逆に速攻を決められ、16-10で前半を終える。

後半に入っても徳山は堅いDFからの速攻や5番角村のシュートが決まり、また1番片本の好セーブも光り、10分過ぎには10点差にリードを広げる。有明も13番原口のシュート等に必死に食らいつき、粘りを見せるが、徳山の勢いを止めることができず、31-24で徳山が4連覇を成し遂げた。

第16回 全日本ビーチハンドボール選手権大会

期日：2014年8月23日、24日　　会場：愛知県南知多町 小枡公園海岸 特設コート

［最終順位］

【男子】優勝：MJクラブ　準優勝：FST BH 2014　3位：東海 Weeds!・ABG

【女子】優勝：ABG　準優勝：SHINE　3位：東海 Weeds!A・ハミングバード

大会レポート

（公財）日本ハンドボール協会普及部ビーチハンドボール専門委員会

沖本 哲郎

昨今の不安定な天候の中、空模様と駆け引きしながら、8月23日、24日の2日間、愛知県南知多町小桝海岸の特設コートにて男子11チーム、女子5チーム、オープン参加の中高生チーム3チームを集めて開催しました。愛知県でのビーチハンドボールの全国大会は今回が初めての開催となりました。「ハンドボール王国愛知」らしく、ほとんどの参加チームが愛知というのが今年の大会の特色でした。ただし、ビーチハンドボールの経験が無いチームが多数参加しており、初日の試合では、ルールを確認しながらという場面も目立ちました。しかしながら、2日目には2点シュートを狙っていく姿勢が多くみられ、対応力の高さに驚きました。

今年はどのチームも実力が拮抗しており、セットカウントが同点でショットアウトにより決着をつける試合が数多くみられ、全体的なレベルの向上を感じました。中高生の試合でも果敢に2点シュートを狙っていくことが見られ、さすがは「ハンドボール王国愛知」だと思わされました。

今回審判を依頼しておりました愛知県協会の審判団もビーチハンドボールは見たことがない状態でしたので、初日はビーチハンドボール経験者とペアを組んでいただき、通常のハンドボールとの違いを覚えてもらいました。経験豊富な審判ばかりでしたので、2日目には十分慣れていたようです。今後のビーチハンドボールの審判普及に繋がっていければと思います。また、今までにない大会を行いたいと思い、GAP様によるストレッチ、熱中症対策の無料講座、キネシオテーピング協会様によるキネシオテーピングの無料講座を開催いたしました。残念ながら、コートと講座の場所が少し離れた位置だった為、参加された人数は少なかったようでしたが、参加者からは講座を受けてよかったとの声をいただきました。集客方法に関しては今後の課題としていきます。

GAP様、キネシオテーピング協会様ご協力ありがとうございました。最後になりましたが、突然の豪雨による中断後、試合ができるように全員で協力してコートの復旧作業を手伝っていただけたことに心より感謝いたします。南知多町様、内海観光協会様には会場や備品を貸し出していただきありがとうございました。株式会社モルテン様には試合球を提供していただきありがとうございました。名鉄観光サービス様には宿泊施設の斡旋していただきありがとうございました。竹内様、内田様には何度も大会開催に向けての打ち合わせや事前準備に参加していただきありがとうございました。日本ハンドボール協会の川上専務、愛知県ハンドボール協会の新貝会長、はじめ多くの関係者にお越しいただき、誠にありがとうございました。ビーチハンドボールを生で見られたことがない方が多くいらっしゃった中で、どの試合もビーチハンドボールの魅力を知っていただくのには十分な試合ができたと感じました。また、大会運営に協力していただきました、中京大学、東海 Weeds! の皆様には感謝しております。

初めての全国大会ということで至らないことが多々あったので、来年度以降も開催させていただけるのであれば、今年の反省をいかして、より良い大会を開催していきたいと考えております。今後もビーチハンドボールの普及、技術の向上を目指して活動いたしますので、ご支援のほど、よろしくお願いします。

［戦評］

【男子】

▼準決勝

MJクラブ　2（20－21, 18－16, 4－0）1　東海 Weeds!

愛知県の両チームともビーチハンドボールの経験が長い選手ばかり、MJクラブは、大場を中心に2点シュートで得点し、東海 Weeds! は下野を中心に2点シュートで得点するゲームとなった。1セット目は20対20でゴールデンゴール方式の延長となり、東海 Weeds! の下野が決勝点をあげた。2セット目も最後までもつれたがMJクラブが逃げ切った。ショットアウトはMJクラブキーパーの好セーブの前に東海 Weeds! が1点も取れず、MJクラブの勝利となった。

FST BH 2014　2（11－18, 17－12, 10－8）1　ABG

1セット目、FST BH 2014松永が1人で10点を取ったが、ABGは高良、小川、小林がまんべんなく得点を重ね、ABGが先取。2セット目、逆にFST BH 2014が攻め手を増やし、マークを分散することで全員で得点を積み重ねることができ、FST BH 2014が2セット目を取った。ショットアウトではFST BH 2014小松の活躍により、FST BH 2014の勝利となった。

▼決勝

MJクラブ　2（10－8, 9－15, 8－6）1　FST BH 2014

MJクラブは、全員が攻撃することでマークを散らしてどこからでも点を取る攻撃、FST BH 2014は松永、塚本主体に点を取る攻撃で一進一退となり、1セット目はMJクラブ、2セット目はFST BH 2014がそれぞれセットを取った。準決勝に続き、決勝もショットアウトでの決着となった。それぞれのキーパーの好セーブにより5人終了時で6対6の同点となり、6人目での決着となった。

【女子】

▼準決勝

ABG　2（13－4, 14－3）0　東海 Weeds!A

序盤はなかなか得点が動かない試合展開であったが、ABGのディフェンスが機能し始め、東海 Weeds!A の攻撃を抑えると、谷川の2点シュートを中心に得点を重ね、1セット目、2セット目ともにABGが取り、勝利した。

SHINE　2（15－11, 15－9）0　ハミングバード

1セット目、ハミングバードは、着実に1点シュートを積み重ねていくが、SHINE木下、望月の2点シュートで差を広げSHINEが1セット目を取った。2セット目はハミングバード星野の2点シュートで応戦するも、SHINE木下、望月の2点シュートの決定力が勝り、SHINEが2セット目も取り、勝利した。

▼決勝

ABG　2（10－13, 10－9, 7－6）1　SHINE

1セット目、最初から流れを掴んだSHINEが終始リードを保ちながら、1セット目を先取した。2セット目に入ってもSHINE優位の展開の中、何とかABGが食らいつき同点で終了。ゴールデンゴールの延長でAGB斉木が1点をもぎ取り、2セット目はAGBが取り、ショットアウトでの決着となった。AGBは2本止められたものの2点シュート3本で6点、SHINEは1本しか止められなかったが2点シュート2本、1点シュート2本で6点となり、延長へ。お互いに6人目は決められず、7人目AGB安田の好判断でカットを成功させ、沓掛が確実に1点を取りAGBが勝利した。

［総括］ 男女ともに経験豊富なチームが上位となり、実力も均衡しているため、ショットアウトでの決着が多くどこが優勝してもおかしくない戦いだった。今回初めてビーチハンドボールを経験するチームが多かったが、どのチームも2点シュートを積極的に狙っていく姿勢が印象的だった。どのチームもビーチハンドボールのおもしろさを掴んでもらえたと思うので、競技人口の拡大に期待したい。





MJ クラブ監督　武野 量介

この度第 16 回全日本ビーチハンドボール選手権大会を優勝しました、愛知県 MJ クラブです。このような由緒ある大会で好成績を残せましたことに非常に誇りに感じております。

私たち MJ クラブは愛知県東三河地区を活動拠点としたハンドボールチームで、週 1 回ハンドボールの練習、週 1 回をレクリエーションとして活動を行っております。クラブの創立 35 年ほどと歴史があり、現在の主要メンバーは 3 代目のメンバーで構成されております。豊橋南高校の M と時習館高校の J をとり、MJ クラブとして発足されました。現在は東三河在住のメンバーを中心にハンドボール経験者、未経験者にて構成されております。中心メンバーは中京大学、中部大学の OB です。私たち MJ クラブのビーチハンドボールの活動としましては約 10 年程前から千葉県富浦で行われる富浦さざ波大会へ毎年参加しております。さざ波大会では【スーパーハミングバード】【ハミングバード Z】【ハミングバード匠】としてチーム名を変えて参加しております。本年まで本大会の主催が遠方であることと、メンバーの確保に難儀をしておったことにより参加が出来ませんでしたが、本年は愛知県主催であること、メンバーが確保出来た事により参加することができました。

勝因としましては、くじ運が良かった事がもっともの理由と考えておりますが、【チームの約束事】が徹底出来たことが勝因の 1 つと考えております。ビーチハンドボールはここ数年で一気に普及し、2 点プレーが標準化し、いかに 2 点を取り、いかに 2 点を守るかという事が争点となってきました。

今大会は約束事として相手チームの勝負所を考え、徹底的にそのプレーヤーには打たせない、勝負所のプレーヤーには打たせると言う約束事をチームで統一し、ディフェンスを徹底しました。

個人的主観ではありますが、ビーチハンドボールは特にプレーヤーのその日の体調、間合い、コンディションが非常にプレーに出やすいと考えています。私たちは試合前に相手の試合を観察し、勝負所の選定、試合に入ってからの勝負所の選定、いわゆるディフェンスの約束事を作り、ディフェンスしてきました。ピルエットシュートは非常に体力を使うため、個人のコンディションとシュート確率は必ず影響していると感じておりました。少しでも 2 点失点の確率を下げ、失点を防ぐことが重要ではないかと考えております。

最後に非常に運にも恵まれ、優勝と言う最高の成績を収めることが出来、光栄に思います。来年も良い結果が残せるよう、努力精進してまいります。この度はありがとうございました。

ビーチハンドボール日本代表女子キャプテン　山本 沙貴

はじめに、第 16 回全日本ビーチハンドボール選手権大会の開催にあたり悪天候の中、運営をして頂いた日本ハンドボール協会、ビーチハンドボール委員会及び、愛知県ハンドボール協会、運営補助員の皆様方に心より感謝申し上げます。

本年は、OCA（アジアオリンピック評議会）による「第 4 回アジアビーチゲームズ」が 11 月 14 日～ 23 日の 10 日間にわたり、タイのプーケットにて開催されます。実施競技は 22 競技 147 種目あり、ビーチハンドボールはプーケットのカロンビーチにて競技を行いますが、私たちはこの大会に日本代表として出場致します。

ビーチハンドボール日本代表女子の中谷、沓掛、斉木の三名は、前回の中国や前々回のオマーンで開催されたアジアビーチゲームズを経験している選手で、ゲームの中心となってくれています。また、それ以外のメンバーも昨年度の、全日本ビーチハンドボール選手権大会にて優勝を経験しています。

今大会を迎えるにあたり、8 月 2 日～ 3 日に千葉県富浦海岸で行われた「第 18 回ビーチハンドフェスタ富浦さざ波大会」に出場した時の反省を行い、大会直前の練習も行いました。戦い方として、アジアビーチゲームズを想定し、カットインやミドルシュートで簡単な 1 点を取りに行くよりも、2 点となるシュートで得点を取りに行くこととしました。今大会を優勝することが出来たものの、「SHINE」との決勝戦では、ショットアウト含めシュートミスやラインクロスが多く、苦しい展開が続く試合となりました。

大会を振り返り、チームの課題として、「2 点となるシュートを増やすこと」が挙げられます。ピルエットシュートやスカイプレー、オフェンスキーパーシュート、ゴールキーパーから直接のシュートの精度を上げる事です。それぞれアジアビーチゲームズまでに出来るだけ多く時間を作り、課題を克服する練習を重ねて、精度を上げていきたいと思います。

インドアのハンドボールとはまた一味違う面白さをより多くの方に知ってもらい、ビーチハンドボールがこれから益々発展していく為にも、アジアビーチゲームズではメダルを獲得出来るように、チーム一丸となって戦いたいと思います。練習場所の確保も困難な中ではありますが、選手個々が出来るだけの努力をして、11 月まで力を更に高めて参ります。

最後になりましたが、今大会開催の為にご尽力いただきました関係者の皆様、厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

第 4 回アジアビーチゲームズ
(Olympic Council of Asia 主催)

開催地：タイ／プーケット
期　間：2014 年 11 月 14 日～23 日（10 日間）



2014 年カテゴリー別日本代表選手団名簿：男子

代表　第 17 回アジア競技大会

9月19日－10月4日
韓国・仁川

役職	名前	所属
チームリーダー	川上憲太	（公財）日本ハンドボール協会
監督	松井幸嗣	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	山口　修	（公財）日本ハンドボール協会
トレーナー	飯田純一郎	株式会社Ｊ・フロントライン
情報分析	市村志朗	（公財）日本ハンドボール協会

背番号	名前	所属
1	木村昌丈	大崎電気
2	森　淳	大崎電気
3	小澤広太	大崎電気
5	高智海吏	トヨタ車体
7	宮﨑大輔	大崎電気
8	渡部　仁	トヨタ車体
9	石川　出	大崎電気
11	信太弘樹	大崎電気
12	久保侑生	大同特殊鋼
13	加藤嵩士	大同特殊鋼
14	元木博紀	大崎電気
18	成田幸平	Fuchse Berlin (GER)
19	野村喜亮	大同特殊鋼
20	岸川英誉	大同特殊鋼
22	千々波英明	大同特殊鋼
26	小室大地	大崎電気

学生　第 22 回世界学生選手権

8月3日－10日
ポルトガル・ブラガ

役職	名前	所属
団長	福地賢介	全日本学生ハンドボール連盟
監督	大城　章	全日本学生ハンドボール連盟
コーチ	横手健太	全日本学生ハンドボール連盟
トレーナー	永井正之	ながい接骨院

背番号	名前	所属
1	岩下祐太	トヨタ紡織九州
2	藤江恭輔	大同特殊鋼
3	池辺大貴	大同特殊鋼
4	野村浩輝	湧永製薬
5	子安貴之	湧永製薬
6	小塩豪紀	豊田合成
7	山田隼也	トヨタ自動車東日本
8	植垣健人	大崎電気
9	玉城慶也	早稲田大学
10	内海祐輔	早稲田大学
11	森田啓亮	早稲田大学
12	加藤芳規	筑波大学
13	東江雄斗	早稲田大学
14	村田知紀	国士舘大学
15	松本崇聖	日本体育大学
17	小山哲也	日本体育大学

U-22　第 2 回 U-22 東アジア選手権

6月29日－7月6日
香港

役職	名前	所属
監督	松　喜美夫	全日本学生ハンドボール連盟
コーチ	寺田弘太	関東学生ハンドボール連盟
コーチ	市村志朗	関東学生ハンドボール連盟
トレーナー	堀内貴志	関東学生ハンドボール連盟

背番号	名前	所属
10	桐生正崇	早稲田大学
3	福岡佑哉	早稲田大学
7	楳木武士	筑波大学
4	仲程海渡	東海大学
8	津波古駿介	東海大学
2	堤由貴	明治大学
5	吉野樹	明治大学
6	杉田諒太	国士舘大学
1	小峰大知	国士舘大学
11	水町孝太郎	日本大学
13	荒川蔵人	日本大学
14	原健也	日本大学
12	友兼尚也	日本体育大学
9	大和田翔馬	富士大学
17	佐藤立盛	東海大学
15	鹿子島京美	函館大学

ジュニア（U-21）　第 14 回男子ジュニアアジア選手権

8月2日－8月14日
イラン・タブリーズ

役職	名前	所属
団長	近森克彦	（公財）日本ハンドボール協会
監督	佐藤壮一郎	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	滝川一徳	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	吉村　晃	（公財）日本ハンドボール協会
ドクター	有田　忍	小波瀬病院
トレーナー	島　俊也	マッターホルンリハビリテーション病院

背番号	名前	所属
1	柿崎雅俊	法政大学
2	川島悠太郎	早稲田大学
4	西山尚希	早稲田大学
5	岡松正剛	筑波大学
6	庄子直志	国士舘大学
7	堀　広輝	筑波大学
8	藤　勢流	日本体育大学
9	田中　圭	筑波大学
10	瀧澤尚也	明治大学
11	安倍竜之介	国士舘大学
12	西出克己	日本体育大学
13	屋比久浩之	日本体育大学
14	今野利彦	日本体育大学
16	坂井　幹	筑波大学
17	玉川裕康	国士舘大学
18	徳田新之介	筑波大学
20	服部友郎	筑波大学
27	楳木武士	筑波大学

ユース（U-19）　第 6 回男子ユースアジア選手権

9月4日－15日
ヨルダン・アンマン

役職	名前	所属
団長	志々場修二	（公財）日本ハンドボール協会
監督	内記　徹	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	北林健治	（公財）日本ハンドボール協会
ドクター	大西信三	筑波大学附属病院
トレーナー	大岡恒雄	マッターホルンリハビリテーション病院

背番号	名前	所属
1	袰屋竜流	岩手県立不来方高等学校
2	森隆太郎	東海大学
3	高橋拓也	群馬県立富岡高等学校
4	康本侃司	茨城県立藤代紫水高等学校
5	田里亮稀	興南高等学校
6	小澤　基	函館大学付属有斗高等学校
7	伊舎堂博武	興南高等学校
8	大谷由岐也	北陸高等学校
9	清家卓也	宮崎県立延岡工業高等学校
10	安倍竜之介	国士舘大学
11	安平拓馬	富山県立氷見高等学校
12	森脇　龍	名古屋市立桜台高等学校
13	牧野イサム	愛知県立松蔭高等学校
14	入谷泰成	茨城県立藤代紫水高等学校
15	野村雄也	熊本市立千原台高等学校
16	仲村　充	茨城県立藤代紫水高等学校
17	山本祐輝	浦和学院高等学校
18	山田信也	愛知高等学校

U-16　日韓交流（派遣）

8月29日－9月3日
韓国・亀尾

役職	名前	所属
監督	岩本　明	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	阿部直人	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	近藤恒俊	（公財）日本ハンドボール協会
トレーナー	市川央人	いちかわ接骨院

背番号	名前	所属
1	堀田陽大	大阪体育大学浪商高校
2	青山　稜	茨城県立藤代紫水高校
3	藤原　睦	金沢市立工業高校
4	西川航太	神戸国際大学付属高校
5	高野颯太	浦和学院高校
6	豊里友輔	興南高校
7	田中　周	興南高校
8	服部將成	大阪府立春日丘高校
9	村木幸輝	岡山県立総社高校
10	長弘一輝	山口県立下松工業高校
11	本田悠也	大分高校
12	中村　光	茨城県立藤代紫水高校
13	中村　翼	福井市明倫中学校
14	部井久アダム勇樹	福岡市立多々良中央中学校
15	千葉顕人	茨城県立藤代紫水高校
16	木村圭汰	北陸高校

2014 年カテゴリー別日本代表選手団名簿：女子

代表
第 17 回アジア競技大会
9月19日－10月4日
韓国・仁川

役職	名前	所属
チームリーダー	津川　昭	（公財）日本ハンドボール協会
監督	栗山雅倫	（公財）日本ハンドボール協会
トレーナー	高野内俊也	一般財団法人日本予防医学協会
情報分析	小笠原一生	（公財）日本ハンドボール協会
情報分析	田口貴仁	（公財）日本ハンドボール協会

背番号	名前	所属
1	飛田季実子	ソニーセミコンダクタ
3	本多　恵	SK Aarhus (DEN)
6	石野実加子	北國銀行
7	錦織　新	ソニーセミコンダクタ
9	横嶋かおる	北國銀行
13	勝連智恵	オムロン
14	横嶋　彩	北國銀行
15	角南　唯	北國銀行
16	白石さと	東京女子体育大学
17	東濱裕子	オムロン
20	石立真悠子	Fehervar KC (HUN)
21	相澤莉乃	オムロン
22	藤間かおり	オムロン
24	原　希美	三重バイオレットアイリス
28	永田しおり	オムロン
29	松村杏里	広島メイプルレッズ

学生
第 22 回世界学生選手権
8月3日－10日
ポルトガル・ギマランイス

役職	名前	所属
監督	樫塚正一	全日本学生ハンドボール連盟
コーチ	齋藤慎太郎	全日本学生ハンドボール連盟
トレーナー	佐野裕美	全日本学生ハンドボール連盟

背番号	名前	所属
1	網谷涼子	ソニーセミコンダクタ
2	河田知美	北國銀行
3	多田仁美	三重バイオレットアイリス
4	安倍千夏	ソニーセミコンダクタ
5	加藤夕貴	三重バイオレットアイリス
6	永塚　梓	日本体育大学
7	矢崎貴子	日本体育大学
8	山下真里奈	東海大学
9	川畑博美	東京女子体育大学
10	田中　茜	東京女子体育大学
11	森本方乃香	早稲田大学
12	茶圓　遥	大阪体育大学
13	細江みづき	日本体育大学
14	竹下佳慧	武庫川女子大学
15	諸岡世奈	東海大学
16	板野　陽	大阪教育大学

U-22
第 2 回 U-22 東アジア選手権
6月29日－7月6日
香港

役職	名前	所属
監督	山﨑英幸	関西学生ハンドボール連盟
コーチ	松木優也	関西学生ハンドボール連盟
トレーナー	川崎久美子	関西学生ハンドボール連盟

背番号	名前	所属
1	板野　陽	大阪教育大学
2	河嶋英里	大阪体育大学
3	堀川真奈	大阪教育大学
4	藤田佑奈	立命館大学
13	大山真奈	大阪体育大学
6	川﨑彩花	関西大学
8	荒川　彩	京都教育大学
7	原彩咲花	武庫川女子大学
9	眞継麻礼	大阪教育大学
10	角南果帆	大阪体育大学
11	太刀川明	関西大学
12	花村美香	武庫川女子大学
5	徳永千紘	大阪体育大学
15	高宮　咲	大阪教育大学
14	田邊理紗	同志社大学
17	宇野史織	大阪教育大学

ジュニア（U-20）
第19回女子ジュニア世界選手権
6月28日－7月13日
クロアチア・コプリヴニツア

役職	名前	所属
団長	川上憲太	（公財）日本ハンドボール協会
監督	亀井好弘	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	古橋幹夫	（公財）日本ハンドボール協会
ドクター	有田忍	小波瀬病院
トレーナー	花岡美智子	（公財）日本ハンドボール協会

No.	名前	所属
1	森村美紅	大阪体育大学
2	永田美香	北國銀行
3	岩渕いくみ	日本体育大学
4	佐々木春乃	大阪体育大学
5	深田彩加	東海大学
6	江藤美佳	日本体育大学
7	北原佑美	大阪体育大学
8	星野千春	日本体育大学
9	岩﨑成美	筑波大学
10	シン愛美香	東海大学
11	三田未稀	東京女子体育大学
12	水落萌香	福岡教育大学
13	田村美沙紀	筑波大学
14	秋山なつみ	大阪体育大学
16	馬場敦子	大阪体育大学
17	長谷川小夏	大阪体育大学
18	河野　萌	福岡教育大学

ユース（U-18）
第 5 回女子ユース世界選手権
7月20日－8月3日
マケドニア・オフリド

役職	名前	所属
監督	石川浩和	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	辻　賀奈子	（公財）日本ハンドボール協会
ドクター	貝沼圭吾	独立行政法人国立病院機構三重病院
トレーナー	宿利政生	連雀整骨院

No.	名前	所属
1	岩見佳音	三重バイオレットアイリス
2	河原畑祐子	佼成学園女子高校
3	川上智菜美	早稲田大学
4	初見実椰子	佼成学園女子高校
5	亀井杏花	桐蔭横浜大学
6	谷　華花	大阪体育大学
7	藤田明日香	ソニーセミコンダクタ
8	村松沙耶	愛知商業高校
9	三橋未来	東京女子体育大学
10	斗米菜月	佼成学園女子高校
11	鈴木沙弥香	日本体育大学
12	岸本栞奈	華陵高校
13	近藤万春	大阪体育大学
14	團玲伊奈	東京女子体育大学
15	眞方彩帆	埼玉栄高校
17	青　麗子	白梅学園高校

U-16
日韓交流（派遣）
8月31日－9月5日
韓国・馬山

役職	名前	所属
団長	角　紘昭	（公財）日本ハンドボール協会
監督	尾石智洋	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	麻生　薫	（公財）日本ハンドボール協会
トレーナー	内田春菜	東京・目黒／山中整骨院

背番号	名前	所属
1	渋佐知里	川崎市立高津高等学校
2	中山佳穂	夙川学院高校
3	大松澤彩夏	聖和学園高等学校
4	尾辻素乃子	粕屋町立粕屋中学校
5	西村美桜里	四天王寺高等学校
6	山本李虹	佼成学園女子高校
7	安藤かよこ	星城高等学校
8	南夏津美	京都府立洛北高等学校
9	吉田真紀	山口県立華陵高等学校
10	中村風夏	川崎市立高津高等学校
11	吉田瑞萌	佼成学園女子高校
12	元松晃子	熊本市立千原台高校
13	相澤菜月	水海道第二高等学校
14	金城ありさ	浦添市立港川中学校
15	衣川直緒	星城高等学校
16	金山桃歌	富山市立堀川中学校



第22回 日・韓・中ジュニア交流競技会

期日：2014年8月23日～29日（金） 競技は25日～27日（水）の3日間
会場：岩手県・花巻市総合体育館

■最終順位
【男子】優勝：韓国　2位：岩手県　3位：**日本**　4位：中国
【女子】優勝：韓国　2位：**日本**　3位：岩手県　4位：中国

第22回日・韓・中ジュニア交流競技会を振り返って

総監督　船木 浩久（全国高体連専門部委員長）

本競技会は、1993年日本の福島県で第1回大会が開催され、今回で22回目となりました。今回は岩手県・花巻市において8月24日（日）から28日（木）まで開催されました。日本選手団は11競技に244名、ハンドボール競技からは全国から選抜した選手28名、全国高体連専門部から役員5名の33名が参加しました。

8月24日（日）に花巻温泉ホテル千秋閣に集合、競技会場となる花巻市総合体育館に移動し練習しました。午後、ホテル千秋閣会議室にて監督審判会議が行われ、翌日からの試合方法・ユニフォーム等の確認をしました。夜、ホテル千秋閣で開会式、各国団長の挨拶、各国選手代表による宣誓がありました。オープニングの地元高校生によるチェロ演奏と鬼剣舞は素晴らしいものでした。

8月25日（月）からの試合は、花巻市総合体育館を会場に日本・韓国・中国に開催地岩手県選抜チームを加え4チームの総当たりで行われました。男女とも一日目の開催地岩手県選抜には勝ちました。二日目の中国に女子は快勝しましたが、男子は惜敗でした。三日目の韓国には、男女とも敗れ、対戦成績女子は2勝1敗で2位、男子は1勝2敗で3位と残念な結果に終わりました。なお、試合結果については、監督・選手から別途報告があるので省略します。

27日（水）は、競技終了後、ホテル千秋閣でフレンドシップ交流会が開催されました。オープニングの地元高校生による書道ライブ・鹿踊りは圧巻でした。その後、各国男女のグループが歌とダンスのパフォーマンスを披露し、会場は大変盛り上がりました。

今回、日本代表として参加した選手達は、男子、阿部富夫監督・酒井信幸コーチ、女子、北中弘規監督・中山学コーチ指導のもと、直前合宿が組めず、限られた人数、短い時間の中で戦術や個人の役割等を確認しましたが、男子は全員が揃った練習ができず、不安を抱えながら大会に臨むことになりました。しかし、全国から選りすぐった精鋭の集合体であり、日を追うごとにまとまりのある集団になりました。成績は残念な結果でしたが、日本代表として恥ずかしくない戦いをしてくれたと思っています。ただ、韓国の技術の高さ、体幹の強さは見習う必要があり、中国の大型化にも対応していかなければなりません。女子は勝負できるレベルにありますが、男子はかなりの強化が必要かと感じました。来年の韓国開催に向け、それなりの結果を残せるように今後取り組んでいきます。選手は、この貴重な国際大会の経験を活かし、次の舞台で活躍してくれることを期待します。





大会の参加に際しては、4月に大阪で選考会、8月17日から3泊4日で男子は大崎電気埼玉事業所と味の素ナショナルトレーニングセンターの協力により、日本体育大学・早稲田大学・日本大学と事前合宿、女子は北國銀行スポーツセンターと小松市立高校で事前合宿を行いました。大会開催地の岩手県ハンドボール協会を始め、選手を派遣いただいた各校の監督並びに関係機関の皆様から多大なるご支援とご協力を賜りましたことに心から感謝を申し上げます。

今後とも、全国高体連活動へのご理解とご支援をお願いしまして大会参加報告と致します。

男子チーム監督　阿部 富夫（茨城県立鉾田農業高校）

選手選考会は、4月19日（土）～20日（日）大阪府堺市家原大池体育館において、男子48名が参加して行われました。体力測定、ゲーム、面接を通して、各ポジションの専門的技術、ハンドボールへの取り組む姿勢等を考慮し、代表選手14名を選考しました。

事前合宿を、8月17日（日）～20日（水）大崎電気埼玉事業所研修センターを宿舎にNTC・日大・日体大で行いました。国体ブロック予選の関係で、選手14名が揃って練習することはできませんでした。合宿を通して、日本代表としての心構え、ディフェンス等を確認し、個人・チームの課題も明確となりました。

8月24日（日）13:00花巻に集合し、会場である花巻市総合体育館で調整し、その後、開会式に臨みました。

■8月25日（月）：日本　29（13－12, 16－15）27　岩手

立ち上がり硬さが見られ、ディフェンスは機能したがミスなどでボールを奪われ、対応できず2連取される。庄山のフェイントからのシュートなどで得点するが、コンビがとれず9分過ぎには、3対7と4点差となる。10分過ぎからオフェンスのリズムも良くなり、シュートを打って攻防の切換となり、速攻から門間・古屋・中村と3連取し同点とする。その後、一進一退の攻防が続き、前半を13対12の1点リードで終える。後半早々、下地のミドルシュー

トで２点差とし、攻守ともに落ち着いた展開となる。門間のサイド、出口のカットインなどにより、15 分には 22 対 16 と主導権を握る。20 分過ぎには８点差まで広げるが、その後岩手のねばり強いディフェンスからの速攻、勢いのあるプレーにより６連取され、29 分には 28 対 26 の２点差となる。タイムアウトをとり残り時間を確認する。園田のポストで得点するが、すぐに反撃され、29 対 27 で終了する。

【得点】門間 6、下地 5、出口・庄山 3、加藤・園田・土田・古屋・中村 2、吉田・新谷 1

■８月 26 日（火）：日本　30（12 − 17, 18 − 14）31　中国

立ち上がり、中国のカットイン、ポストにより２連取されるが、下地のカットイン、門間のサイド、古屋の速攻で４連取する。その後は、中国の体格を生かしたポスト、パワフルなバックプレーヤーの走り込みに対応できず 14 分に６対６の同点となる。下地のミドルで得点するが、オフェンスのミスから簡単に速攻を許し３連取される。17 分７対９でタイムアウトを取る。ノーマークシュートを打つが、GK に阻止され、反撃を守りきれず得点される。相手の荒いディフェンスで２人退場のチャンスがあったが、得点するがポストに通され失点するなど、前半は 12 対 17 の５点ビハインドで終える。後半に入り、ディフェンスは高い位置で良く機能し、ボールに対してプレーできるよになった。しかし、速攻からノーマークシュートを打つが、GK に阻止され反撃の機会を作れず、リバウンドやカットしたルーズボールを相手に拾われ得点されたり、バックプレーヤーのカットイン、ポストプレーを守れず、18 分には 18 対 29 と 11 点差とされる。22 分 22 対 31 の９点差でタイムアウトを取り、最後まで集中して自分の役割を果たすことを確認する。ディフェンスの動きが連動するようになり、相手の動きを分断するようになり、GK 花宮もノーマークシュートをことごとく阻止する。土田、下地、庄山のシュートで３連取し、25 分 25 対 31 の６点差で中国がタイムアウトをとる。さらに中村、門間の速攻で２連取する。28 分 30 秒退場 7mT を加藤が決め３点差とする。パワープレー中、29 分 28 秒下地、29 分 56 秒門間と得点するが、30 対 31 で終了する。

【得点】下地 9、門間 6、庄山 4、古屋・中村・土田 3、加藤・園田 1

■８月 27 日（水）：日本　29（12 − 19, 17 − 17）36　韓国

下地のフェイントからのシュートで先制し、土田のロング古屋の速攻、GK 小玉の活躍で 15 分までは７対９と互角の展開となる。その後庄山が退場となり、２連取され 19 分タイムアウトを取る。新谷のポストで得点し、退場を得る。土田のカットイン、門間のサイドで３点差を維持するが、土田の退場をはさんでミスやパスカットにより５連取され、12 対 19 の７点ビハインドで前半を終える。後半に入り、高い位置でボールに対するディフェンスが機能し、下地の速攻、新谷のポストにより 10 分 18 対 23 の５点差まで詰める。しかし、韓国バックプレーヤーの鋭いフェイント、カットインに乱され５連取され、19 分 21 対 32 と 11 点差となる。タイムアウトを取り、最後まで全力を尽くすことを確認する。20 分退場を得た隙に、土田、門間、加藤と３連取するが、すぐに２連取される。23 分過ぎから韓国に退場者が３人続き、庄山、下地、門間の速攻、加藤、阿部の 7mT で５連取し 26 分には 29 対 34 の５点差に詰め寄る。しかし、落ち着いた韓国のオフェンスに対応できず、29 対 36 で終了する。

【得点】土田 6、新谷・門間 5、下地 4、庄山 3、加藤・古屋 2、阿部・



中村 1

フレンドシップ交流会が 19 時 30 分から花巻温泉千秋閣で行われました。各国参加チームがステージで出し物を披露したり、ステージで踊ったりと友好を深め合い、楽しいひとときとなりました。

８月 28 日（木）に朝食後、花巻で解散となりました。

選手選考会に御協力頂いた各高校の顧問の先生方、大阪府の先生方、事前合宿でお世話になった大崎電気東さん、早稲田大学荒木監督、日本大学萩原監督、日体大松井監督には誌面をお借りして、感謝申し上げます。選手にとって、選考会・３泊４日の事前合宿・岩手での交流競技会は、貴重な体験となったと思います。選手の皆さんの、今後の活躍を期待します。

男子チーム主将　下地 利輝（興南高校）

今回の日韓中ハンドボール競技を終えて、国外のチームとの対戦を肌で感じることができ、とてもいい経験になりました。

２日目の中国戦では、日本代表より 10 ㎝も 20 ㎝も大きい相手でしたがそれでも日本代表は得意のスピードをいかして日本のハンドボールをすることができました。自分は 167 ㎝しかなく、相手は 190 ㎝や 200 ㎝が多いなかでスピードを生かした速攻や、間合いをとったフェイントなど小さくても通用するプレーが多くありました。結果は１点差で負けてしまいましたが、最後まで皆が諦めることなく楽しくプレーをすることができました。

３日目の韓国戦は、組織で戦ってくるチームでした。自分たちは簡単なミスが目立ち、それに比べて韓国はミスが少なくシュートも確実に決め、そこで差がひらいてしまいました。でも、自分たちも守って速攻やディフェンスを引きつけてズラしなど組織になって戦うと通用するプレーがありました。

中国、韓国と対戦して自分たちに足りないところや、個人の課題も多く見つかり、本当に貴重な体験をすることができました。そして自分は日本代表のキャプテンをする機会を与えてもらいました。別々のチームだったメンバーをまとめるのはとても大変でしたし、プレー面でも引っ張っていかなくてはならなかったので大変でした。でも、キャプテンをして多くの事を学ぶことができ、最高のメンバーに恵まれていたので本当に良かったです。日韓中で学んだこと、そして自分が通用したプレーなど多くの事を後輩などにも教えてこれからにいかしてほしいです。自分も多くの課題が見つかったのでこれこら修正して今後の糧にしていきたいです。

５日間という短い間でしたが、お世話頂いた諸先生、そして最高な 14 人のメンバーとハンドボールができたことに感謝しています。

男子チーム　中村 誠忠（宮崎県立小林秀峰高校）

今回の日韓中の大会に、自分はハンドボールの日本代表として参

加しました。国際大会は国内の大会とは違い、国と国との勝負なので責任もあるし負けられない試合をすることでもあります。その中で、自分は日本代表としてプレーできることに一番感謝しています。

スタメンで試合には出させてもらいましたが、自分の中では調子があがらずに思うようにプレーができなかったことを後悔しています。初戦からいいスタートを切れなかったのが個人的にもチーム的にも反省点だと思いました。けれど、試合を重ねていくうちにチームの雰囲気も良くなり少しずつ合わせていけることもできました。中国と韓国には負けたけれど、国際試合という、大きな壁があるなかでプレーできたことは本当に貴重な体験をさせてもらうことができたと思います。

短期間でチームを作って全員が揃ったのは試合当日だったけれど、どういう環境の中でもやり切らないといけないという中で、最後にはひとつになれたことがとても良かったと思います。この日本代表としてプレーさせてもらったことをこのまま終わらせずに、これからの自分のハンドボール人生の中で活かしたいと思います。そして、将来も日本代表としての選手になれるように努力して、今回の大会で残った悔しさを、次のカテゴリーで活かせるように日々の練習から、高い意識を持って取り組んで行きたいと思っています。

女子チームコーチ　中山 学（岡山県立倉敷青陵高校）

平成 26 年 4 月 19 日～ 20 日大阪府高体連専門部の方々に御協力いただきながら、堺市家原大池体育館で選考会を実施し、男女各 14 名を選考しました。今年は国体各ブロック予選がまちまちで事前合宿の日程調整が難しく、各校の先生方にはご無理なお願いを受け入れて頂き実施することができました。

事前合宿は 8 月 17 日から 20 日で実施し、会場は北國銀行体育館と小松市立高等学校体育館をお借りしてしました。北國銀行荷川取監督をはじめ、小松市立高校古橋先生、大阪体育大学楠本監督、国士舘大学吉田監督にはテストマッチでお世話になりました。全員揃っての合宿にならず、チーム構成では苦労もありましたが選手一人一人が意識を持って取り組んでくれたおかげで徐々にチームとしての実感を持つことができました。大型中国チームのパワー対策、韓国のスピードやシュートテクニックを北國銀行、大学チームとの対戦で練習できたことは大きな収穫でした。本当にありがとうございました。また、この場をお借りして快く選手を出して頂いた各校顧問の先生方や選考から合宿まで多くの関係者の方々に関わっていただきました。心から厚く御礼申し上げます。

さて、試合は初戦岩手選抜と立ち上がり緊張から動きが悪く心配しましたが、徐々に日頃の力を発揮してくれました。昨年苦戦した中国にも快勝し、優勝するために宿敵韓国と対戦、残り 5 分までリードしながら守り切れず惜敗。この敗戦を選手たちは次のステージで大きな糧にしてくれると信じています。

■ 8 月 25 日（月）：対岩手選抜　30（15 － 5, 15 － 7）12

両チームとも堅さと緊張からシュートが決まらず、DF も機能せず相手ノーマークシュートを GK 中村のファインセーブでしのぎ、5 分過ぎから伊地知・村松・富永・服部の活躍で 7 連取できました。また、途中出場の森のサイドシュートや速攻で前半を大きくリードして終わりました。後半は地元岩手選抜が意地を見せるものの、栗本の積極的な DF や自らの速攻で勝負を決めることができました。思い通りの展開ができなくなったときコートとベンチがひとつなって、お互いに指示しあう姿は選抜チームの垣根を越えた瞬間でした。終わってみれば完勝でしたが、それ以上に「チーム力」を感じた試合となりました。

【得点】伊地知 8、村松 5、富永 4、栗本・服部 3、高松・森 2、斗米・富本・和田 1

■ 8 月 26 日（火）：対中国　45（23 － 12, 22 － 7）19

7 分過ぎまで 5 対 5 の互角な展開となりましたが、そこから河原畑のミドルシュート、7mT と伊地知の速攻でリズムができリードを広げることに成功しました。DF は富永、村松、河原畑、斗米がしっかり動き中国にシュートチャンスを与えないで、斗米のブラインドシュートなどで大きくリードして折り返しました。後半も前半以上の動きを見せて、和田のサイドシュートや高松のカットイン、高田・富本の速攻で加点して攻撃が爆発しました。昨年苦杯をなめた中国に対して点数が開いても全員が集中力を切らさず、最後まで最高の攻守を見せてくれて、終わってみれば全員得点で昨年のリベンジを果たし明日へと弾みをつける対戦でした。

【得点】伊地知 10、河原畑 9、村松 8、斗米 5、富本 3、栗本・森・高田 2、富永・高松・和田・服部 1

■ 8 月 27 日（水）：対韓国　22（13 － 12, 9 － 12）24

立ち上がりから韓国の攻撃が決まり 1 対 5 とリードを許しましたが、村松の PV シュートや伊地知の速攻で 13 分過ぎ同点に追いついて、その後 5 連取でリード広げることができました。日本の DF が機能し、また GK の神谷の好セーブもあって、韓国を 10 分以上無得点に押さえることができました。今回課題としてきた DF の効果が現れて、昨年以上の成果を実感できました。しかし、韓国もエースの活躍で前半を 13 対 12 の日本 1 点リードで折り返す結果になりました。後半も DF でよく足が動き、服部の速攻やサイドシュートでリードする展開で終盤を迎えることができたのですが、

徐々に迫りくる韓国に残り3分で追いつかれてしまいました。相手が攻め倦み日本がカットから速攻に出たのですが、相手GKに阻まれ流れが相手に移って、残り2分でついに逆転許してしまいました。そのまま逃げ切られ2点差で惜敗となりました。選手達は最後まで足を止めず、素晴らしい戦いをしてくれました。チーム全員が本当に悔しさをにじませたことに、選手達が将来世界へ羽ばたく可能性を見た気がします。今回取り組んできたDFを来年はより発展させて是非優勝を勝ち取りたいと思います。

【得点】伊地知6、村松・服部4、河原畑3、斗米・富永2、高松1

女子チーム主将　斗米 菜月（佼成学園女子高校）

この度、岩手県で行われました日韓中ジュニア交流競技会に参加させて頂きましたが、すぐ隣の国々とはいえ、私たち日本人との違いを改めて感じることができました。

中国戦では、開始15分くらいまで、相手選手のプレーに対応できず、自分たちの流れを作ることが出来ませんでした。チームで出だしを意識していただけに、納得のいく試合運びではありませんでした。15分をすぎて、やっと日本らしいディフェンスから速攻のプレーが決まり出しました。それからは、自分たちの流れに持っていくことができました。その後も速攻・ミドルシュート・カットインプレーなどが決まり最終的には45対19で勝利をおさめることができました。

韓国戦では出だし0対5でリードされ、緊張が目立ち動きが硬くなっていました。日本の1点目はキーパーからのワンマン速攻でした。その1点からチーム全体に勢いが付きはじめ、同点に追いつくことができました。その後は取って取られてのシーソーゲームでラスト1分30秒には、22対22の同点になりました。そこで韓国チームがタイムアウトを取りました。そこから韓国の右サイドシュート・速攻を決められ22対24で惜しくも敗れてしまいました。

私は試合を振り返ってみますと、日本はチームとしての練習がたくさんできなかったこともありますが、試合の出だしの悪さと、シュートの決定力の差が試合の勝敗を分けたと感じました。

今回、私たちがお世話になりました北中先生と中山先生には、ハンドボールのプレーもそうですが、人間として必要なことなど実に様々なことを学ばせていただきました。私たち選手14人は、お互い協力し、短期間でチームとなることができました。これは本当に貴重な経験をさせていただけたと感謝しています。

この大会を通して学んだことをこれからのハンドボール人生に活かしていけるようにすると共にこの大会に関わってくださった全て



の方々に感謝させていただきます。皆様、ありがとうございました。

女子チーム　村松 沙耶（愛知県立愛知商業高校）

私は、岩手県で行われた日韓中ジュニア交流競技会に参加しました。大会に参加するにあたり、石川県で3泊4日の事前合宿を行いました。代表メンバーで初めて練習をしたのですが、やはり自分たちのそれぞれの学校でのプレーがでてしまい、なかなか息が合いませんでした。そこで重要になるのが、「コミュニケーション」でした。自分の考えをみんなに言葉で伝えるようになってから、だんだんと息が合うようになり、チームらしくなっていきました。

そして合宿から3日後、岩手県に再び集まりました。岩手、中国、韓国それぞれの代表チームと対戦をして、私は韓国戦が一番印象に残っています。初めは点差がありましたが、徐々に追いつき、途中からはシーソーゲームが続きました。最終的には2点差で負けてしまいました。実際に韓国と試合をして、1対1の強さやどんな体勢からでもシュートを決められるところが、私達日本チームとの差だったと思います。結果は負けてしまいましたが、全力を出しきれ、チームの長所である「守って速攻」を活かして点を取ることができたので試合がとても楽しく感じました。

本来国内戦ならばライバルなのに、同じチームの仲間として一緒にプレーをし、同じ目標に向かって共に頑張ることができ、とても良い刺激になりました。短い間でしたが、北中先生と中山先生と14人で一つのチームとなり、韓国、中国と戦えた経験は私にとって財産となりました。今回学んだことを私の今後のハンドボール生活に活かしていきます。

この大会や、事前合宿を支えてくださった全ての方々に感謝し、これからも頑張ります。本当にありがとうございました。

第34回 全国クラブハンドボール選手権大会中地区大会

開催期日：平成26年9月13日、14日
会　　場：一宮市総合体育館

大会を振り返って

愛知県ハンドボール協会社会人連盟　植村 真司

東日本大震災復興支援「とどけよう　スポーツの力を東北へ！」を大会のスローガンのもと、一宮市総合体育館でDIADORAアリーナ、いちい信金アリーナを会場に第34回全国クラブハンドボール選手権大会中地区大会が9月13日（土）、14日（日）開催されました。全国クラブ選手権の大会での34回の歴史の中で愛知県では初の開催でもあり、愛知県協会関係者は身の引き締まる思いで大会運営に臨みました。本来ならばこの大会は7月中旬に開催されるはずでしたが、愛知県で7月に第4回全日本社会人ハンドボール選手権の開催もあり、本年度は9月開催となりました。開催時期が変わったことで大会参加選手にはご迷惑をおかけしたかもしれませんが、暑さも少し和らぎ、良かったのではないかと思います。

大会前日の12日（金）には、代表者会議に全チーム出席して頂き、開会式では、愛知県開催地代表FSV TOKAI川口健太郎選手の力強い選手宣誓が開会式に花を添えました。

昨年度より東地区、中地区、西地区の3地区に分かれての大会開催となり、今大会は各府県1チーム＋開催地で、参加チームは男子16チーム、女子13チーム（残念ながらすべての府県からの参加にはなりませんでした。）が熱戦を繰り広げました。大会開催にあたり、初日で負けたチームも含め全チームが2日間にわたって試合が出来るように交流戦も実施しました。

今回の大会は男子：ボンチフェローズ、女子：御座候と、大阪府のチームがアベック優勝を飾りました。両チームとも1回戦より決勝まで横綱相撲の試合展開で素晴らしいチームでした。また、各試合1回戦より熱戦で、同点7mスローコンテストでの試合が3つもあり、各チームとも一段と力が入る試合が多く、体育館内が熱気であふれていました。これも各チームのハンドボールに対する情熱と、日頃の練習の賜物と感動をしました。愛知県のチームも男子3位にFSV



【最終順位】

■男子	■女子
優勝：ボンチフェローズ	優勝：御座候
2位：KSV	2位：GET'S
3位：FSV TOKAI	3位：いろは
4位：咲乱	4位：OCEAN



TOKAI、女子のOCEANは3位決定戦で敗れたものの、7mスローコンテストで地元を盛り上げてくれました。

また、本大会期間中には審判のA級、B級審査が行われ、レベルが高く、緊張感のあるなかで、28名の受験者に審判を務めて頂き、県内の審判員にもよい刺激となりました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、愛知県での開催にあたってご支援、ご協力を頂きました関係各位に深く感謝を申し上げるとともに、来年度以降も今大会が各地で盛大に開催されることを祈念し、お礼の挨拶とさせて頂きます。ありがとうございました。

戦　評

■男子決勝

ボンチフェローズ　27（14-10, 13-12）22　KSV

先制点はボンチフェローズ。15番関山の速攻で決勝の幕を開けた。その後、お互いが点を取り合うも、ボンチフェローズの3-2-1DFが徐々に機能し、相手のミスを速攻につなげ点差を広げる。しかし、KSVも14番原田の連続得点で踏みとどまると、中盤以降は両チームとも退場者を出すなどし、得点の取り合いとなり、ボンチフェローズの4点リードで前半を終える。

後半序盤、ボンチフェローズ11番山本のロング、カットインなどで最大8点まで点差が開く。KSVはDFを5-1に変え対応し、一時は3点差まで縮めるが、ボンチフェローズは点差を生かし、落ち着いてゲームを運び、27対22で勝利を収めた。両チームともにスピードを生かしたOFが見られ、決勝にふさわしい好ゲームであった。

■女子決勝

御座候　20（10-9, 10-3）12　GET' S

両者一歩も譲らず、固い守りからの速攻、確実なセット力が持ち味同士で、速攻の戻りも速く、コーナーまで追いつめ、簡単に許さない。7mスローもキーパーの好セーブが光り、互角の戦いになった。勝負の行方はオフェンス力にかかってくる。文字通りキーマンとなったGET' Sの10番天野と御座候の3番山本の打ち合い、アシストパスからの得点が決めてとなる展開に。また、前半から警告、退場が加算されて激しい攻防が繰り広げられた。

足が止まり始めた後半、御座候の確実なコンビと速攻で3点連取した。しばらく小康状態が続くも、河田、道越のあうんのコンビプレー、山本のミドル、長棟の切れ味鋭いサイドシュートでGET' Sを突き離しにかかる。GET' Sも天野のミドルで加点するも、シュートがポストに嫌われ、なかなか追いつけず、点差が重くのしかかった。20対12と点差は開いたが、攻守ともにバランスのとれた両チームの健闘が光る好ゲームで大会を締めくくった。



男子優勝：ボンチフェローズ

ボンチフェローズ監督兼選手　大野 順也

はじめに、第34回全国クラブハンドボール選手権・中地区大会の開催にあたり、スムーズな運営をして頂いた日本ハンドボール協会及び全日本社会人ハンドボール連盟、愛知県ハンドボール協会・一宮市ハンドボール協会の関係各位の皆様方に心より感謝申し上げます。

ボンチフェローズ（桃山学院高校・大学OB主体）は、大阪社会人1部リーグに所属しており、ジャパンオープントーナメント優勝さらに全日本総合出場を目指し、活動しております。近年は、兄弟チームであるHC大阪『ベテランチーム』も1部リーグに昇格した為、大阪社会人ハンドボールを盛り上げるべく、ボンチグループでホームページ（http://bonchi-hcosaka.com/）を運営し、ハンドボールの普及活動も行っております。

今大会は、JOT大阪予選敗戦後、気持ちを新たにして挑んだ大会でもありました。メンバー全員で参加できなかった事が残念ですが、チームとしては、ベテランの池田・吉田を軸に、若手の関山主将が25点（4試合合計チーム得点王）勝負所で決め、両サイド徳永・堀・中本も安定した得点を重ね、岩城・山本が意表を突くシュートでチームを盛り上げてくれました。そして今年新加入の西端のポストプレーは、チームに新たな可能性が出てきております。近藤のトップディフェンスも冴えわたり、元村・新名の両キーパーは、計算通りの活躍で、優勝することができました。

これもひとえに、杣山英司総監督、選手のご家族ご友人、また練習場所を提供して頂いている桃山学院高校の高橋精一先生、木村雅俊先生、桃山学院大学の金南均先生のご協力のおかげです。改めてお礼申し上げます。

最後に、対戦した全てのチーム、ジャッジ頂いた審判の方々、また今大会の為にご尽力頂きました関係者の皆様には、改めまして感謝申し上げます。

女子優勝：御座候

御座候代表　関山 明子

ようやく念願の優勝を成し遂げることができ、うれしい気持ちとホッとした気持ちでいっぱいです。私達は、去年の全国クラブ選手権大会中地区準優勝という悔しい結果から一年､｢今年こそは！｣とチーム一丸となって練習してきました。

去年のチームとはメンバーは少し違い、お姐様方はA登録は引退され「御座姐」というチームでマスターズ大会4連覇という偉業を成し遂げられました。新メンバーを迎え、さらなるパワーアップをめざし、他府県から通ってくれるメンバーも数名いますが、皆数少ない練習日程を調整し、怪我人等も出る中、今大会に臨みました。

初戦の立ち上がりの悪さには不安も少しよぎりましたが、一戦一戦闘ううちに試合の中で成長していくチームの皆を頼もしく、カッコよく思いました。社会人になっても皆ハンドボールが大好きで、御座候が大好きで、それぞれが自分の役割を果たせ、皆に支えられて勝ち得た全国クラブ選手権中地区優勝は最高です。まだまだ課題はたくさん残りますが、さらに上を目指し、これからも頑張りたいと思います。

最後になりましたが、今大会の開催にあたりご尽力頂きました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



～日本リーグの集客を考える～

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

日本リーグが始まった。来年の40周年の節目を前にどのような盛り上がりで試合会場が沸き返るか楽しみにしたい。

日本リーグにとって、日本ハンドボール界にとって強化とともにテーマの一つに観客増がある。上層部からは毎回、ゲキが飛ぶ。しかし、掛け声とは裏腹に上昇カーブが描き切れないのが現状である。

前回の観客数を眺めてみた。プレーオフ3試合を除いて、男子は73試合、女子は63試合をこなす。男女開催もあるし、数字だけでは一概に結論を出すのは難しいし､発表された観客数も正確さに欠けるのではという“疑惑”もなくはないが、一つの目安にはなるだろう。

その結果は―。男子の総数は6万人弱、女子は4万5千人余。1試合平均にすると、男子800人余、女子700人余だ。男女を通した最多は女子の2400人余。男子では1660人余。最少は128人というのが男子にある。女子では245人だ。

100人余という数字をどのように評価すればいいのだろうか。選手、運営スタッフを合わせた人数と変わらないのではないかと思う。

話はちょっとそれるが、バレーボールのVリーグ機構はリーグ開幕を控え、「増客研修会」なるものを開いた。バレーボールもかつて注目を集めたような“にぎやかさ”はない。相当な危機感を持っていることは想像できる。研修会には各チームや開催都道府県協会から約60人が参加し、議論を重ねたという。

ちなみにメニューを紹介する。チーム・開催地の集客ノウハウの共有、前回リーグでの観戦者調査のデータ活用方法、SNS活用方法、パネルディスカッションや新しいシーズンに向けた行動計画策定のグループワークなど。

ハンドボールのリーグ機構としても、参考にできることは採り入れ、活用すればどうだろうか。

どの競技でも観客増には頭を悩ませている。「何とかいい方法はないか」とあの手この手で知恵を絞っている。地域のイベントと組み合わせたり、子供たちの大会との併催など、暗中模索が続く。プロ野球しかり、Jリーグしかりである。ましてや、マイナー競技に至っては、なおのこと努力に努力が求められる。観客の年齢構成、リピーター度、告知方法は適切かなど、打つ手を広範囲に模索する必要があることは間違いあるまい。

大勢のファン・サポーターの声援は、選手の闘争心をあおり、レベルアップにも少なからず貢献するはずだ。リオ五輪、東京五輪を目指す強化と並んで、バックアップ体制（観客増）の構築は欠かせない。

帯同報告（第5回女子ユース世界選手権）

帯同ドクター　貝沼圭吾

マケドニアで開催されました第5回女子ユース世界選手権に帯同ドクターとして参加いたしましたので、報告いたします。

事前準備

昨年のアジア予選から帯同しており、石川監督、辻コーチ、宿利トレーナーとスタッフは変わりませんでしたので、事前の連絡など非常にスムーズに進めることができました。5月に佼成学園女子高で行われた合宿に足を運び、アンチドーピングに関する講義を行うとともに、内科的疾患、整形外科的疾患および使用薬の確認を行いました。さらに昨年のアジアユースで施行した尿検査の結果を選手にも指導し、水分摂取の重要性を伝えました。マケドニアは中欧の内陸国であり、気候などは日本と同程度の気温かつ湿度が低いことがわかっており、また感染症情報などはなかったため、さらなる準備は行いませんでした。

移動

最も懸念していたのは、30時間に及ぶ移動による時差、筋緊張でした。また乗継時間に過度の空調による環境変化にも悩まされました。空港内で毛布を調達し、対応しました。また宿利トレーナーが筋緊張を緩和するマットなどを持参してくれましたので、選手には使用させるようにしました。

大会期間中

・医科学的側面から

初戦での顔面接触に伴う裂傷に対する縫合処置を行いました。それ以外については、気管支炎、胃腸炎、月経困難に対する内服薬を処方しました。軽い足関節捻挫、肩痛、筋挫傷などありましたが、トレーナーによるケアにより悪化は認めておりません。本大会でも尿検査による尿比重評価を行いました。前回に比べても水分摂取を日ごろから意識する選手が多く、強く促す必要はなかったように感じます。結果はまだまとめておりませんので、後日報告させていただきます。



・ドーピング検査

対ロシアの際にドーピング検査が行われました。試合前に、lead DCOより検査があることを伝えられました。方法は以下の手順でした。ハーフタイムに私がドーピングコントロールルームへ赴き、背番号を確認の上、番号抽選。結果はみずに、そのまま封筒内へ。1名抽出。後半20分の時点で、封筒開封。→ゲーム終了後、当該選手とともに検査室へ。

事前講習で検査方法についても映像で指導してありましたので、選手も戸惑うことなく検査を受けました。また、その選手からは『こんな世界選手権でドーピング検査を受けるなんて本当な名誉なことで、くじを引いてもらってありがとうございました』といってくれた時には、この数年のドーピング防止で様々に活動していた私にとっては最もうれしい一言でした。

・生活環境について

食環境について、大いに問題があると思われます。選手たちも自覚していますが、炭水化物に偏りすぎる傾向がありました。バランスの良い食事がなされていたとは考えにくい状況でした。1日だけスタッフ・選手とレストランで食事を行いましたが、そこでの食事は非常に良質なものであり、こうしたものを常に食べさせることができればなと感じました。しかしながら、バンコクでの食事に比べれば、まだ食材料に対する抵抗が少なかったのか量としてはたくさん摂取していたように思います。海外遠征時におけるバランス食が食事だけで摂取できない際に、どういった工夫をすることで改善できるのかという点も今後にむけた一つの課題と考えます。

・住環境について

今回の遠征では、オフリドという世界遺産にも登録されているリゾート地を中心に、首都スコピエとストルミツァという3都市で開催されました。オフリドはリゾート地であるため、宿



泊環境も整備されておりました。決勝トーナメント１回戦で敗北してからストルミツァに移動となりましたが、その際のホテルで問題が発生しました。全チームが同じホテルに宿泊となりましたが、日本チームが宿泊した部屋が３階の屋根裏フロアに割り当てられ、冷蔵庫もなく、日ごろ使っていなさそうなところでホコリなどが非常に気になりました。選手からも何とか変更できないのでしょうかという希望が強く、IHF スタッフ、現地スタッフとかなり強い口調で交渉しました。ホテルを変えられないのか？　IHF 本部が滞在するホテルは空いていないのか？　依頼したものの、変更という手段はないということでした。同じ参加費用を支払っているのに、この扱いはどうなのだと伝え、理解はしていただき、フロアに共用冷蔵庫を設置、またタオルの増量、フロアの再クリーニングなどを徹底して行っていただき、さらにはフルーツのサービス、プールでのドリンクサービスなどがついてきました。言うべきことをきちんと伝える、また言うべき相手をしっかり見極めることの重要性を認識しました。

他チームを見て

ハンガリーチームはリラックスタイムとして、選手スタッフがホテルの廊下に寝そべって、みんなで映画を見るというような時間を設けていました。また、ヨーロッパの各チームは分析に非常に多くの労力を注ぎ、ミーティングなども個別で行う（おそらく GK と CP）といった工夫もなされておりました。

現在ヨーロッパで研修している方々のネットワークを利用して、実際にどのような医科学的サポートをしているのか学びに行きたいと心から願うようになりました。

まとめ

医科学スタッフとしては、食環境の整備、また選手たちと遠征中に話をしましたが、日ごろからの食事のアドバイザーなどがいたらいいのにという話が出ました。さっそく栄養メンバーと相談し、そうした点を詰めることができればと動いております。

審判員としてもたくさん勉強できた大会でした。国のレベルによって、レフェリーのレベルも様々で、若い選手たちがこれから世界の舞台と戦うに当たっては、審判の力量を見極める力も必要だと再確認しました。

さらに、ハンドボールファンとしては、なにより日本チームのたくましい戦いが、マケドニアのファンたちを熱狂させていたことに熱く感動しました。平均身長でおそらく 15 ㎝は低い彼女たちの、向かっていく姿勢は、ファンの心をつかみ、写真撮影やサインを求められるシーンも多くありました。こうした姿が、世界の懸け橋になれるのだなと鳥肌すら立つ瞬間でした。

昨年のアジアユースからはじまり、２年間選手たちと時間を過ごさせていただき、心身ともに成長した姿を見るのはとてもエキサイティングな毎日でした。そんな彼女たちをより世界の高い舞台で戦わせるためにも、医科学の重要性も再認識しました。機会があれば、ヨーロッパの国々が、どのような医科学サポートをしているのか研修したいと思います。

最後に、本大会の参加にあたっては、私の個人的事情のために、チームを３日早く離れることをご快諾いただき帯同させていただきました津川強化本部長、佐久間医事委員長、石川監督、辻コーチ、宿利トレーナー、また、そのために余分な手間をとっていただきました日本協会の床尾さんはじめ皆様、エモックの市瀬さんはじめ皆様に心より御礼申し上げます。特に、石川監督、辻コーチ、宿利トレーナーにおいては、帰路もご不便をおかけしたことと存じますが、無事に帰国していただき安堵の気持ちでいっぱいです。

こういった表現は不謹慎かもしれませんが、私にとって夢のような３週間の遠征でした。なにより石川先生のチーム全体への心配り、辻先生の選手たちへの深い愛情、宿利トレーナーのみんなをホッとさせる癒しの技、そして選手たちの全力プレー、これらが結集したチームだったのではと感じています。

私自身、スポーツ医学へのさらなる研鑽をつみ、審判員、通訳としてもよりチームに貢献できるよう日々生活し、また機会がありましたら、参加させていただきたいと存じます。今後ともどうぞよろしくお願いします。

帯同報告（第19回女子U-20世界選手権／第14回男子ジュニアアジア選手権）

日本ハンドボール協会医事委員、チームドクター　有田　忍

第19回女子U-20世界選手権（クロアチア）帯同報告

今回、私は第19回女子U-20世界選手権にチームドクターとして帯同させて頂きましたので、現地の状況や活動内容についてご報告致します。

大会は2014年6月28日から7月15日の日程で、クロアチアの各地で開催されました。2008年の北京五輪男子最終予選（ザダル）、2010年の世界学生選手権（隣国ハンガリー）、2012年の女子ユース世界選手権（隣国モンテネグロ）に帯同した経験から、気候と食事についてはあまり心配していませんでした。実際、気候は温暖で食事も一般的なヨーロッパ風で、概ね日本人の口に合うものでした。念のためOS1経口補水液を多めに準備していただきましたが、食事が摂れなくなったのは、生理痛に伴う気分不良の1名のみで、その選手も1日足らずで食欲は回復しました。亀井監督の指示でチームとして炊飯器と米を50㎏、その他カップ麺などの日本食を現地に持ち込みました。

6月22日に味の素NTCでの直前合宿に合流し、早速行ったメディカルチェックで、足関節捻挫を受傷している選手が3名いましたが、受傷後数日から数週間が経過しており、軽めのテーピングで十分プレーできる状態でした。その他は、軽度の関節周囲炎が数名いただけで、重症の故障者、体調不良者はおらず、ほぼベストコンディションで大会に臨むことが出来ました。

大会には24カ国が参加し、予選リーグを6チームずつA～Dの4つに分かれて行い、上位各4チームが決勝トーナメントに進むというものでした。日本が所属するグループCは試合会場がクロアチア北西部のKoprovnicaという中規模都市で、そこからバスで30分程度ののどかなDvrovaceという街のHotel Picockに、約24時間の長旅の後、6月24日に現地入りしました。ホテルの設備、環境は問題なく、食事も初めのうちは食が進まない選手もいましたが、慣れてくると各自で取捨選択し、チームや個人で持参した日本食と合わせて、量としては十分摂れていた様です。下痢や感冒を発症した選手は一人も出ませんでした。

6月28日に大会が始まり、初戦の相手はグループCで最強のハンガリーでした。結果は19対37の大敗でした。技術的なこと戦術的なことは団長や監督の報告に譲りますが、今年からナショナルを始め全てのカテゴリーで導入された攻撃的なDFシステムが、大きくて重たいヨーロッパの選手相手に機能せず、一方的な展開になってしまいました。この流れは翌29日のフランス戦でも修正できず22-33と連敗し、苦しいスタートとなってしまいました。

ここからは休息日を挟んだ1日おきの試合となります。7月1日のコンゴ戦で30対27と順当に今大会初勝利を挙げ、7月3日に2年前のユース世界大会で勝利したポルトガルに対して、DFシステムを修正して臨みましたが、28対34と破れてしまいました。予選突破をかけて、7月5日にスウェーデンと対戦し、強豪相手に後半の途中までリードする展開でしたが、26対26の引き分けに終わりました。

予選リーグ最終日のこの日に、ドーピングコントロールが行われました。CP1名が抽出されましたが、この日のスウェーデン戦にほぼフル出場し、水分もあまり摂取していなかったため、なかなか尿意を催さず、約1時間半、水2.5Lを飲んだ後にようやく採尿できました。この選手は過去の代表合宿時にドーピングに関する教育を受けており、更にインカレで1度ドーピングコントロールを経験していたおかげで検査手順には慣れており、滞りなく検査は終了しました。

序盤2試合の大量失点が響き、得失点差で残念ながら予選Cグループ5位となり、17-24位を決めるプレジデントカップに回る事となりました。7月6日にバスで約2時間、北西方向のスロベニア国境に近いSveti Martinという山あいの町のコテージ風のホテルに移動しました。こちらに移ってからは雨の日が多かった事もあり朝晩は肌寒く、空調が壊れている部屋もあり体調管理が難しいのではないかと心配しましたが、選手の自己管理のおかげで杞憂に終わりました。

プレジデントカップの参加国は韓国を除くアジア3カ国、アフリカ3カ国、南アメリカ2カ国で、体格、技術ともにヨーロッパの各チームとの差は歴然としていました。大差の圧勝を期待しておりましたが、予想外に苦戦し2試合とも僅差の激戦の末、連勝して17位で大会を終了しました。

大会を通じて感じた事ですが、スタミナ面での強化が必要と思いました。体格差を補うために導入された攻撃的なDFシステムですが、試合の後半に疲労のために脚が止まる選手が散見されました。1試合を通して、大きなヨーロッパの選手に対して機動力を使って守り、更にクイックスタートなどの速攻を仕掛けるためには、体幹・下肢を中心とした筋力と持久力のレベルアップが必要であり、これは所属チームでの日頃からの栄養管理や鍛錬が必要でしょう。大会終了後に亀井監督の指導の下、各選手が反省点と今後の課題を整理し、それに対する計画を立て、個人面談、決意表明が行われました。チームは一旦解散しますが、各選手が自覚を持って継続的に努力してくれる事でしょう。医科学のサポートとしては、大会中の疲労度の評価や疲労回復、栄養指導などに介入の余地があると思います。今大会で花岡トレーナーが試験的に実施した、計測チップを使った試合中の運動量（移動距離とスピード）の定量化は一つのヒントになるような気がします。また、どのカテゴリーでも世界選手権は国内各地に会場が分かれて行われ、バス移動が多くなり、期間も長期に及ぶため、酔い止めの薬（トラベルミン）を多めに準備する必要があると感じました。（特に女子の若年層では。帰りの飛行機内で足りなくなってしまいました）。

この世代には3年前の2011ユースアジア選手権（熊本県山

鹿市）の時から2012ユース世界選手権、2013アジア選手権（カザフスタン）と、亀井監督、花岡トレーナーと共に、足掛け4年携わる機会を与えていただきました。同じ世代をこれほどの長期間継続的に見る機会は初めてでした。技術的には、着実に成長する選手、伸び悩んでいるように見える選手など様々ですが、人間的には皆、ひと回りもふた回りも成長し、チームとしても年を追うごとに成熟してきたように感じました。具体的には代表選手として必要な、長時間移動時の体調管理（航空機内での冷房、乾燥、下肢静脈血栓症対策、時差等）、ドーピングに対する注意、現地での栄養管理、選手間やスタッフとの積極的なコミュニケーションのスキルが年を追う毎に上がってきているように感じました。偶然ですが、この世代は2019熊本での世界選手権、2020東京オリンピックでの中心となる世代でしょう。今後も順調に成長し、ケガや傷害により脱落する事なく、一人でも多くの選手がナショナルのユニフォームを着て、メダル獲得を果たしてくれる事を期待したいと思います。

今大会では、軽度の風邪、下痢や軽度の外傷はありましたが、全選手が全試合に戦える状態でコートに立つことができたことは、メディカルスタッフとして何よりも良かったと思います。毎晩遅くまで選手のケアをしてくださった、トレーナーの花岡さん、ありがとうございました。また、クロアチア協会を通じて選手団の到着から帰国までの交渉・調整に奔走していただいた日本協会の床尾さんをはじめ、本遠征にご尽力いただきました関係者の皆様方に厚く御礼申し上げまして、私の報告とさせていただきます。

第14回男子ジュニアアジア選手権帯同報告

このたび2014年8月3日～14日にイラン（タブリーズ）で開催されました、第14回男子ジュニアアジア選手権に帯同させていただきましたので御報告いたします。

私個人としては4回目のイラン遠征でしたが、北西部のタブリーズという都市での開催は初めてでした。日中は暑いが、朝晩は割と肌寒くなる事、湿度は低い事、意外に標高が高く息切れしやすい事などは予想通りでした。水はミネラルウォーターを食事、練習、試合の際に希望通りに無料で入手できました。食事に関しても、Tabriz International Hotelはこの地域では高級なホテル（従業員による金銭盗難が発生したのには参りましたが）だったこと、選手の国際経験が比較的豊富で体調管理の意識が高かったこと等から、あまり問題はありませんでした。またチームとして、日本からレトルトのご飯とカレー等の日本食を大量に持ち込み、現地で入手した電子レンジで調理をしたのも有効でした。

出発前のANTC集合時点での傷病の状況の主なものとしては、脛骨疲労骨折1名、膝内側々副靭帯損傷1名、膝前十字靭帯損傷後の膝不安定性を有する選手1名、回復途中の足関節捻挫2名という状態でした。

8月3日からの大会期間中の傷害発生状況ですが、足関節捻挫2名、母指MP関節挫傷1名の他は四肢・体幹の打撲（1名は肋骨骨折の疑い）が数名出ました。最終戦の3位決定戦（勝者が世界選手権の出場権を獲得。1点を争うゲームで非常に白熱した）では相手イラン選手に前腕をつかまれて擦過創を負う選手が続出しました。この際に2、3名の選手のユニホームに血液が付着したため審判から退場を指示される選手が出ました。前半終了間際であったためハーフタイムに洗面所で洗って血液が落ちてくれたので事なきを得ましたが、プレーが激しい男子ではユニホームを1色2枚ずつ準備することが必要と感じました。外傷ではないのですが、大会終盤の予選リーグ最終日（8月11日）に嘔吐下痢症を1名発症しました。状況から感染性胃腸炎が疑われましたので、選手を隔離、手洗いの徹底、ミネラルウォーターの回し飲みの禁止などの対応を取りました。その後、同様の嘔吐下痢1名、下痢のみ2名が続けて発症しましたが、何とか小規模の流行に食い止めることが出来たと考えております。嘔吐下痢の2名は辛そうでしたが、自らお粥を作ってくださった近森団長をはじめ、チーム全体でこの危機を乗り切り、全選手が大一番の3位決定戦に出場することが出来、勝利することが出来ました。20回近く、チームドクターとして帯同してきましたが、感染性胃腸炎は初めての経験でしたので、良い勉強になりました。

また、予選リーグ最終日にはDoping controlが行われました。以前はアジアの若年層の大会では日本を除いて、Doping controlが行われることは殆どありませんでしたが、昨年のカザフスタンでの女子のアジア選手権でも行われたように、AHF主催の大会では毎回行われるようです。CP1名が抽出されましたが、初体験であった割にはスムーズに検査を終了しました。

反省すべき点はいくつかあります。日本から持ち込んだテーピングテープの見積もりが甘く、不足したこと。伊藤超短波さんが貸与して下さった超音波治療機械が、出発前の連携の不備で所在が分からなくなり持ち込めなかったこと。いずれもインターハイ終了後に後発で合流された滝川コーチに持って来ていただき、事無きを得ましたが、日本協会の原田さんを始め、多くの方々に御迷惑をおかけしました。この場を借りて、お礼とお詫びを申し上げます。

今大会は、初の3位入賞、世界ジュニア選手権の出場権獲得という素晴らしい結果を納める事が出来ました。私個人的には1998年の第6回大会（バーレーン）への帯同が医科学委員としての初仕事で、以来足掛け17年、6回目の挑戦で初めて予選を突破する事が出来ました。中東の笛によるアンフェアな時代が長かっただけに、今回のフェアな大会運営、審判には違和感さえ覚えましたが、3位決定戦を勝利した瞬間には、過去に悔し涙を流して来た選手、スタッフの顔が浮かんで来て、感涙に咽せいでしまいました。

このチームは2年前のアジアユースで準優勝を納めており、どのような選手達なのか楽しみにしておりましたが、田中キャプテンを中心とした、期待通りの心技体を兼ね備えた素晴らしい選手達でした。この世代は2020年の東京五輪で主力となる世代でもあります。故障に注意して、どんどん成長してもらいたいと思います。

最後になりましたが、チームをサポートしていただいた日本協会の皆様を始め、所属チームの関係者、そして近森団長、佐藤監督、滝川・吉村両コーチ、島トレーナーに感謝を申し上げて私の報告とさせていただきます。

2014NTS 北海道ブロックトレーニング

函館ハンドボール協会　葛西　猛

NTS 北海道ブロックトレーニングが、8 月 30 日～ 31 日の 2 日間に渡り、函館大学体育館で行われました。

スタッフ 7 名、対象の中学生 10 名、高校生 10 名、中学指導者 5 名、高校指導者 5 名の 37 名と、体育館での練習では一般参加希望の中学生と高校生と指導者 100 名余りが参加し、発掘・育成活動が行われました。

1 日目は指導者向けに日本協会・田中茂氏による指導者向けの説明・講義が行われ今回のトレーニングについての共通理解がスタッフ・指導者に図られ、これをもとにしてトレーニングが行われました。

今年のトレーニングは「1 対 1 を強いコンタクトで守る」を重点に、1 日目のメニューとしては、「位置取りを意識したフットワーク」「ストマックタッチや 2 人 1 組の押し合い、ボールチェックなどのコンタクトを意識したドリル」「コーンを中心とした DF3 対 4 トレーニング」「DF4 対 6 トレーニング」が行われました。宿舎では、夕食時に栄養士による「食」に関する講習も行われました。

2 日目は午前中の時間帯では、1 日目の復習を含めたアップをスタートに、「体を傾けることを意識したフットワーク（蛇行・円周をダッシュなど）」「個人スキルトレーニング（バランスボールなど）」「片手キャッチ、ポストパス、縦ブロックのトレーニング」などが行われました。

初日の指導者向けの説明で練習の意図が明確にされ、参加した指導者も明確なビジョンの中で積極的に指導に携わることができました。その甲斐もあり参加した選手は、特に DF は強いアタック、声を出しての連携、相手の動きの予測判断において高い意識を持ってトレーニングすることができました。また、4 対 6 のトレーニングおいては積極的な牽制とクロスアタックの意識を持って守ることを学ぶことができ、大変有意義なトレーニングになりました。

2 日目においては OF での体の使い方、組織的にゴールを狙う意識、BP と PV の攻撃面での連携を意識した有意義なトレーニングが行われました。総じて中高生には「声を出した連携」「予測判断からの正確で強いプレー」「体の上手な使い方」が意識付けされたようです。「声が出なければ連携ができない」と感想を言う中学生もいました。これらの経験をこれからのトレーニングに生かそうとビデオやメモを取る指導者の姿も多く、大変有意義なものとなりました。一般参加者を募ったことで、会場に対する選手の数が多くなりすぎ、一般参加者にとっては少し窮屈な中でのトレーニングになってしまいました。次の機会までの改善・検討事項かと考えます。





最後に、デモンストレータを兼ねて頂いたスタッフの方々、函館大学の選手のみなさん、田中茂氏には大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。



2014NTS 関東ブロックトレーニング

NTS 関東運営委員長　菊田 政行

開催日時：2014 年 8 月 30 日（土）～ 31（日）、
9 月 6 日（土）～ 9 月 7 日（日）
会場：山梨県　塩山中学校体育館、山梨北中学校体育館、
県立小瀬スポーツ公園体育館、県立緑が丘スポーツ公園体育館
参加者：（※延べ人数）※ NTS スタッフ 30 名、※ 補助指導者 65 名
選手　小学生 48 名、中学生 48 名、高校生 48 名

今年度の関東ブロックトレーニングを山梨県協会の皆様のご理解とご協力の下、8 月下旬、9 月上旬の 2 週に渡り開催いたしました。15 回目を数え、運営・指導面ともにスムーズに展開され、中学生・高校生のトレーニングは 1 泊 2 日で実施いたしました。

トレーニングはインストラクターを始め指導スタッフの熱意あるご指導のおかげで、意図が明確でポイントが理解しやすく説明・実践されていると、選手・補助指導者からも大変好評でした。

また、NTS 技術指導委員会よりディレクターの田中茂氏、青戸あかね氏にご来県を賜り、スケジュールの中で選手への激励・トレーニング指導、さらにはアジアジュニア選手権大会から凱旋したブロックインストラクターの滝川一徳氏（ナショナルスタッフ）より、アジアのハンドボール情勢と情報データの分析についての講義を頂き、トレーニング参加の選手・指導者にとっては日本代表チームに対しての夢や関心・期待を一層抱く素晴らしい情報を得ることが出来ました。今年は高校生の参加者が 1・2 年生に限定されたことにより、例年以上に将来性溢れる有望選手が集まった感があります。参加の選手並びに関係者には、この経験を糧に一層の努力精進をご期待いたします。

開催県のはからいで開いた夜の懇親会は、ディレクター・インストラクター・補助指導者・地元協会のスタッフ等を交えての情報交換に大いに盛り上がり、ハンドボール談義に華が咲きました。参加者にとって大変有意義な研修の時間を過ごすことが出来ました。

今後の課題としては、ブロックトレーニング期間中に指導者の為の講義やディスカッションの時間を確実に確保する事、さらには、中高生に実施している体力測定の結果についても複数年分の記録の推移を公開し、その結果に基づいたトレーニング処方を個々の選手に示し、『世界基準の強い選手』に育って頂くことを切に願うところです。

また、NTS への参加選手の輩出チームが県によっては特定化される傾向にあり、NTS の方針なり運営方法が、一部の関係者にのみに限られ、それ以外の方々に十分に理解されていないのが現状です。各都県においては伝達講習会等を確実に実施していただき、NTS の情報が全チーム、関係者に速やかに浸透することを願います。

例年、開催の時期・会場等については施設の確保を最優先に、国体のブロック大会や各連盟の大会時期、更には学校行事等を考慮して計画実施してきました。今後は NTS15 年間の成果や課題を念頭に会場の確保や運営方法等についても検討を加え、改善して行きたいと考えます。







2014NTS 北信越ブロックトレーニング

NTS 北信越運営委員長　土橋 雅実

8月30日（土）、8月31日（日）の両日、小学生は石川県、北國銀行スポーツセンターで、中・高校生は福井県の北陸電力体育館においてNTSの北信越ブロックトレーニングが開催された。このブロックトレーニングには福井・石川・富山・長野・新潟の5県から小中高生、男女74名の選手と指導者29名、主催者側のインストラクター6名を含め、合計35名の役員・指導者等が参加して行われた。

北信越ブロックからは、すでに15名の中・高校生がアカデミーをはじめU-18・U-16の年代別育成選手として選ばれており、2020年の東京オリンピックをはじめ各カテゴリーの世界大会での活躍が期待されている。今回のブロックトレーニングを経て、選考された選手がセンタートレーニングに参加し、より高度な技術を習得し、すでに選出されている選手と共に、日本を代表するプレーヤーになることを期待したい。このブロックトレーニングでは、指導者を対象とした研修会が行われ、技術指導委員長の大森聡氏よりNTSの目的や今の全日本の現状、克服すべき課題、世界のハンドボールのトレーニング方法等、最新のハンドボール情報や技術力アップのポイントなどについて細かく説明を受けた。また、実技指導では男子は北陸電力、女子は北國銀行チームのご協力をいただき、実技のモデルやアドバイザーとして、インストラクターと共に熱心にご指導を頂いた。

今回のブロックトレーニングを通して、日々の練習のポイントの再確認と、新たなトレーニング課題等が見つかり、有意義な2日間となった。また、指導者の方にとっても間近でトレーニング方法を観察したり、日頃の疑問点などをインストラクターに質問したりすることができ、大きな収穫を得られた。今後のハンドボール界の益々の発展に期待したい。

【主な指導内容】

①ディフェンスの動きづくり
- 詰めの動作とコンタクト
- タイトマークからディープコンタクト
- マークがずれた状況での1対1ディフェンス
- グループスキル4対5
- マークがずれた状況での2対2ディフェンス

②オフェンス
- 傾斜を利用したアウトサイドのカットイン
- ポストとバックプレーヤーとのコンビ
- グループスキル3対3、4対4

③ゴールキーパーのトレーニング

④実践トレーニング（ゲーム）センタートレーニングの選考



指導者研修会の様子



実業団チームによる模範





ブロックトレーニング参加者の練習風景

2014NTS 近畿ブロックトレーニング

NTS 近畿運営委員長　繁田 順子

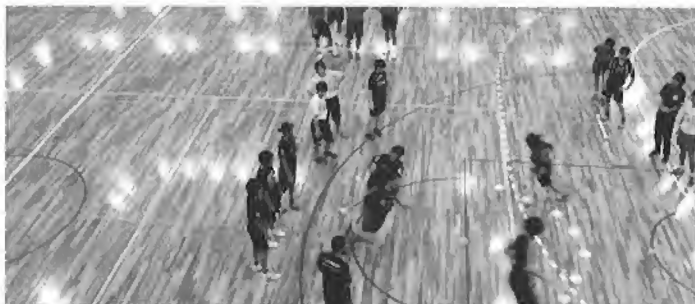
開催日時：2014年8月23日（土）～24日（日）
場所:大阪府　岸和田市総合体育館（23日）、大阪体育大学体育館（24日）
参加者：NTSスタッフ29名、（総数）補助指導者76名
選手：小学生35名、中学生37名、高校生、35名

今年度、2面使用可能な体育館が1日しか確保できずに、開催が危ぶまれていましたが、大阪体育大学のご厚意で何とか開催できたことに運営スタッフは胸をなでおろしました。しかしながら、宿泊を伴うトレーニングは行えずに、各カテゴリー1日ずつの開催になりました。インストラクターの先生方には指導内容もさらに工夫していただき、ご尽力いただきました。ありがとうございました。

さて、トレーニングは、かなり充実したものができたと自負いたしております。選手は最初緊張していましたが、時間が経つにつれ、仲間意識が芽生え、最後のゲーム形式ではチームの垣根を越えた連携が取れていました。体の傾斜を意識したトレーニングやバランスボールを利用したトレーニングなどは選手だけでなく、補助指導者にも好評を得ていました。また、残念ながら中学生・高校生の男子のみになりましたが、管理栄養士の村井美保子氏の食育に関する講義を行っていただき、参考になったという選手もいました、そして、NTS委員長の田口隆氏の補助指導者を対象にした研修会も好評で、運営スタッフの中にも拝聴したかったという声が多数聞かれました。

今後の課題としては体育館の確保が難題です。公共の体育館が確保できなかったとき、今年度同様、トレーニングの内容も変更を余儀なくされてしまいます。選考面では低学年からの選出がチーム事情も重なり、各府県とも苦慮しているようです。特に高校生の選出が難しかったようです。

末筆ながら、NTSのさらなる充実で、各カテゴリー代表チーム、ナショナルチームの活躍につながることを祈念いたしまして近畿ブロックの報告とさせていただきます。







第6回男子ユースアジア選手権に参加して

本田 昭太　田渕 元雄

今回、ヨルダンのアンマンで行われた、第6回男子ユースアジア選手権に参加させて頂きました。期間は9月3日～9月17日まででしたが、私たちは仕事の都合により、9月13日に帰国しました。参加国は、当初の予定では10ヶ国の予定でしたがシリアが不参加になり9ヶ国となりました。レフェリーは、ヨルダン・イラン・バーレーン・タイ・クウェート・日本、そしてヨーロッパからロシアのペアが参加し、合計で7ペアがノミネートされていました。そのうち、クウェート・ロシア・日本の3ペアがIHFレフェリーでした。

私たちのペアは男子カテゴリーの大会は今回が初めてだったので特別な緊張感を持ちながらヨルダンに入りました。思っていた以上にヨルダンでの生活は過ごしやすく、食事や体調管理等の不安もなく試合に臨むことが出来ました。今大会も2日前に現地入りし、シャトルランテストやルールテスト、レフェリー研修を行い、レフェリー同士の共通理解を深め1つのチームとして、ゲームに向けて準備を進めていきました。

初日は割り当てがなく、試合観戦とリザーブでしたが、実際に試合を吹く前に試合のレベルや各チームの特徴、傾向などを観察できたことは、私たちにとってはとてもプラスになりました。ユースと言っても中東各国のプレーはとてもハードで、どちらかと言うとハードよりもラフなのではと思うようなプレーが多々あり、ハードとラフの線引きをしっかりと意識してレフェリングしていかないと荒れた試合になってしまうと感じました。私たちは今大会で、バーレーン対サウジアラビア・バーレーン対イラン・クウェート対サウジアラビアの合計3試合を担当させて頂きました。3試合を通じて感じたことは、罰則の基準を示した後、徹底して罰則を取り続けることの難しさです。基本的なことだとは思いますが、継続して表現することが出来ているレフェリーは少ないのではないでしょうか。そして、最も重要だなと感じたことは、試合を通じて私たち自身のフィーリングを大切にレフェリングすることです。事実判定を確実に取ることはもちろん重要ですが、それ以上に私たちのハンドボール感であったり、ゲームの雰囲気を感じながらレフェリングをすることであったり、それは、10ペアのレフェリーが居れば、10ペアそれぞれのカラーが出て当たり前だと言うことです。このフィーリングの話をロシアのレフェリーからされた時に、がむしゃらにきっちり判定をしようと考えていた事が恥ずかしくなりました。ただ、今回の経験は本当に私たちの成長に繋がったと思います。

最後になりますが、この度、私たちが男子ユースアジア選手権に参加させて頂いたことは、職場の皆様、また、多くの関係者の皆様に多大なるご支援を頂いたからこそだと強く感じております。ありがとうございました。私たちは周りに支えてくれる皆様がいることに感謝し、初心を忘れずに日々精進して行こうと思います。そして、日本のハンドボール界、レフェリー界へ恩返しが出来るような人格を培い成長して行きたいと思いますので、今後とも御指導の程、宜しくお願い致します。





頂点をめざす
すべてのアスリートへ。



原寸大：W45mm×D17mm×H70mm

2チャンネル同時出力で さらに強力サポート。

もっと速く、もっと強く、昨日の自分を超えるために常に限界の先をめざすアスリートたち。
2チャンネル出力になって進化したポータブル低周波治療器は
損傷した筋肉により効果的に働きかけ、場所を選ばずにいつでも自分の体をケアすることができます。
世界のスポーツの舞台を支えるITOのポータブル低周波治療器が
極限で戦うアスリートのコンディショニングをさらに強力サポートします。







※医科向けの医療機器のため、専門家の指導のもとに使用してください

60g 超軽量

本体重量わずか60g（充電池含む）、サイズも極小。ITOの技術が、今までになかった超軽量・コンパクトな低周波治療器を実現しました。

12時間 連続使用

リチウムイオンバッテリーにより、最大12時間の連続使用が可能。この小ささで、スタミナも一流です。

3つの治療モード COMB / CARE / PAIN 鎮痛・治癒

● COMB〈鎮痛+治癒〉 Allタイムケア
トレーニングを終えた全てのアスリートに効果的な、鎮痛と治癒を組み合わせたケアモードです。

● CARE〈治癒〉 OFFタイムケア
移動中や休憩中などの体を休めている時にも、トレーニングで損傷した筋組織の治癒を促進します。

● PAIN〈鎮痛〉 ONタイムケア
トレーニング中など、現場で起こった捻挫や筋肉・関節の痛みといった急なアクシデントに有効です。

2014 EHF Youth Coaches' Course

17th–20th August 2014 in Gdansk, Poland

2014年EHF（ヨーロッパハンドボール連盟）ユースコーチコース

8月17～20日　場所：ポーランド（グダニスク）

名古屋市立西養護学校　**岩塚善哉**（東海学園大学コーチ）

Ⅰ．Youth Coaches' Course について

U-18男子ヨーロッパ選手権の開催（8/14～24）に合わせて、選手の育成方法やユース時期におけるコーチングや、レフェリングについて学ぶことができるセミナーである。ユースコーチコースは4日間の日程で構成されており、EHFのコーチ陣が講義を行ったり、実技講習をしたりする。練習メニューの紹介やU-18男子ヨーロッパ選手権の分析などがある。なお、筆者は、昨年もこのセミナーに参加しており、昨年は、ユース時期の女子を対象としたトレーニング方法の紹介がメインであったが、今回については、ユース時期の男子に特化した練習内容を紹介している。

EHF（Europe handball Federation）は約50ヵ国が加盟しており、CAN（Competence Academy ＆ Network）というシステムを作り、ハンドボール教育を行っている。CANのシステムの一つとして、1996年以降様々なコースを開催しており、マスターコーチコースやトップコーチセミナーに並び、ユースコーチコースは重要な位置付けとなっている。7月には、EHF初の試みであるYoung Coaches' Workshopがオーストリアで開催され、若手指導者の育成に力を入れている。

Ⅱ．講義内容について

Wolfgang Pollany氏（Austria）、Wojciech Nowinski氏（Poland）、そして、6月に日本でも東京、愛知で開催されたトップコーチセミナーで講師をしていたKlaus Feldman氏（Germany）の3人が講師を務めた。

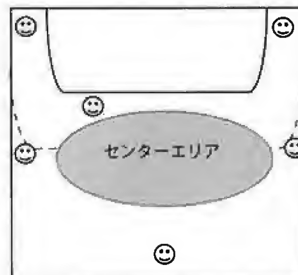
1．練習全般について

全般的に、ユースを対象としていることから、基本的な練習を取り扱ったメニューが多くあった。基礎トレーニングでは、メディスンボールや、ラダーを用いたトレーニングや、筋力トレーニングといった練習を取り入れていた。週に1～2回、10～15分行うのが望ましいという。また、練習の初めに多くのコーディネーショントレーニングを行っていた。身体は、学習したパフォーマンスしかできないので、様々な動きづくりをすることによって判断材料が増えるため、多くの動きをした方が良いという。それは、ポジションでも同じことで、例えば、ピヴォットばかりしていると、ピヴォットだけしかできなくなってしまうので、ユースの選手は多くのポジションや、動きを取り入れた練習を行うべきであるという。

2．オフェンスについて

大切なことは、まず、「ゴールを狙う」ことである。シュートフェイントをして、DFが動いたところをステップワークで逆方向に動きシュートを狙ったり、ステップシュートでDFが前に出てくる前にシュートを狙ったりすること、この個人技術をまず身に付けることが必要である。

DFの位置や、味方プレーヤーの位置を「観察する」そして、「判断する」しきりに述べていた。3:2、3:3、4:4などの練習の中で、ゴールを狙って観察をすることや、切り（トランジション）の練習を取り入れ、瞬時の判断をさせていた。また、バックプレーヤーについては、センターエリアを開けるために、ワイドのポジショニングをさせるための動きを徹底していた。（資料1）



（資料1）センターエリアを開けるために、
バックプレーヤーが、サイドライン付近まで広がる

■カウンターアタック（速攻）

近年の試合では、活発的なディフェンスによって高確率のターンオーバーが増え、ゲーム展開がなされている。得点の30%が速攻によるもので、アタック数、ゴール数ともに増え、オフェンス時間が短くなり、試合が高速化している。選手は、ボールが相手ボールになった瞬間に、自陣へ10秒以内で戻らなければならない。多くのバリエーションや、スピードのアップテンポに対応することが求められる。こうした高速化した試合に対応できるように小さなときから教育していく必要がある。ルーズボールをマイボールにすることや、数的不利な状況で判断をさせるなど、特に育成段階の選手には、緻密な目標設定を立てさせ、その目標に向け一つずつクリアしていくことが大切になってくる。以下は、速攻のポイントである。

速攻におけるボールを持った選手

・ドリブルやパスを使って、ディフェンスとディフェンスの間を抜いていくこと
・スピードをキープしてシュートまでもっていくこと
※ボディフェイントを多く使わないこと

速攻におけるボールを持たない選手

・フリースペースへポジショニングをすること
・ディフェンスの後ろへポジショニングをしないこと
・オープンスペースへ動くこと
※ボディフェイントを多く使わない理由として、スピードが落ちてしまい、相手DFにつかまれてしまうからだという。この点、逆にとらえるとボディフェイントを使っても、スピードを落とさずにできる個人のスキルを身に付けることができれば、突破できる可能性を秘めている。特に、日本人や韓国人といったアジアの選手はステップワークが優れていると述べていた。速攻におけるトレンドの鍵はアジア人が握っているのかもしれない。

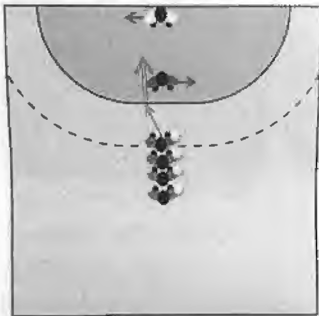
3．キーパー、ディフェンスについて

キーパー練習に特化して、動きづくりからラダートレーニング（資料2）など多くの練習や、キーパーと協力したディフェンス方法の紹介があった。



（資料 2）ボールとラダーを用いたゴールキーパートレーニング

シューターが、6m ライン内に入ってシュートを打ってくることから、6m ラインの中からシュートを打たせた練習を行わせていた。DF がジャンプをしてブロックをしたり、左右に動いたりする中で、キーパーの動きを確認し、協力して DF をすることを強調していた。（資料 3）



（資料 3）DF との連動したキーパートレーニング
（DF が先に動き、動きと反対方向にシュートを打つ）

ディフェンスは、オープンディフェンス（5:1DF、4:2DF など）とクローズディフェンス（6：0DF など）の紹介があった。U-18 ヨーロッパ選手権参加国の 16 か国中、5：1DF は、5 チームである。優勝したフランスや、3 位のスペインは、5：1 ディフェンスをベースにしており、オープンディフェンスが有効に使われているという。フランスのような変則的な DF システム（5：1DF をベースにしながら変則的に 4：2DF になったり、3：2：1DF になったりする）が今後普及していくだろうと述べていた。

上記のことは、フル代表の色が大きく反映されていることがよくわかった。今年初めに行われた EURO2014 において、フランスやスペインといったフル代表のチームが、同じような DF システムで成功を収めているからである。こうした連携をカテゴリーの違う世代の代表間で、共有しているところはとても感心してしまう。

Ⅲ. レフェリングについて

Antonio Goilao 氏が講師を務めた。EHF のレフェリーでもあり、2010 年から EHF のヤングレフェリープロジェクト（YRP）の講師も務めている。

レフェリーには、体力、メンタルの準備、ポジショニング、これが重要であるが、言語のスキルも安定していなければならないという。レフェリーとしてのスキルも必要だが、言語のスキルがなければ、様々な問題が出てくることは明白である。

ジャッジをするときには、なぜ、7m スローなのか、なぜ、2 分間退場なのか、など考えることが大切で、試合前には、映像を用いて問題シーンをどのように判断するのか確認をしているという。そうした映像を EHF で準備して、そのジャッジは正解なのか、不正解なのか、わかるように準備しているという。

Ⅳ. U-18 男子ヨーロッパ選手権について

ポーランドでは、昨年、U-17 女子ヨーロッパ選手権が開催され、今年は、U-18 男子ヨーロッパ選手権、2016 年には、成年男子のヨーロッパ選手権が開催されるにあたり、ポーランドでのハンドボール熱は高まってきている。（資料 4）



（資料 4）満員のスタンド

Youth Coaches' Course では、講習の一部に試合観戦も含まれており、全 6 試合が組み込まれている。EHF の記事にあるように、今大会では、フランス代表が注目されており、北京、ロンドン五輪の金メダリストで、引退したばかりの DF のスペシャリスト Didier Dinart 氏と元フランスの代表キーパー Daouda Karaboué 氏がコーチとしてフランス代表チームを率いている。（http://www.eurohandball.com/article/020077/Europe%e2%80%99s+youngest+take+centre+stage）

そのフランスの試合を何試合かを観戦したが、Dinart 氏と Karaboué 氏率いるフランスは、5：1DF をベースにして、特に 1 枚目の DF が非常に積極的よく動いていた。そのフランスは、予選リーグで 34:26 でハンガリーに負けてしまい、予選リーグでは、ドイツやハンガリーに苦戦をしていたが、決勝でハンガリーと再び対戦することになり、33：30 で今大会の優勝を遂げた。

フランスには、97 年熊本世界選手権で活躍し、日本でも有名な Jackson Richardson 氏の息子である Melvin Richardson 選手（資料 5）がおり、今大会ベストセブンに選ばれている。



（資料 5）ベストセブンの Melvin Richardson 選手

■フランスの DF を崩すためには、どのようにすれば良いか

ドイツの代表コーチにアドバイスもしている講師の Klaus Feldman 氏は、フランスの 1 枚目の DF が、積極的に動いている分、そこにスペースが生まれる。そこを狙ったり、バックプレーヤーやウィングプレーヤーが切り込み（トランジション）、ダブルポストにしたりすることでチャンスが生まれるということを述べていた。実際、ドイツは予選リーグで敗退してしまったもの

の、フランスのDFを崩し、後半序盤までリードして結果的にフランスに30：30の同点で試合を終えている。

この世代は、2020年の東京オリンピックで活躍する世代であり、この上位チームには、今後注目したい。

〈今大会の結果〉1位フランス　2位ハンガリー　3位スペイン

V. EHFのセミナー参加方法（費用）について

EHFのサイト（http://www.eurohandball.com/）に、様々な情報やセミナーが掲載されている。EHFサイト内で、行きたいセミナーをクリックすると、リーフレットがPDFで出てくる。そのリーフレット内に参加申込みの用紙があるので、必要事項を書いてメールで送るという流れになる。参加申込用紙については、「氏名」、「住所」、「国名」、「所属先」、「目的」、「電話番号」、「Eメールアドレス」「ホテルの有無」「到着日、出発日」を記入する。

EHFのCANでは、レフェリーのセミナーや、TDのセミナーなどを開催しており、セミナーの内容によって参加費用が異なる。今回のYouth Coaches' Courseについては、€180（約25,200円）がかかる。なお、参加費用には、カバン、ポロシャツ、資料、ノート、ヨーロッパ選手権特別席用のカードなどが含まれ、最終日に頂ける修了証や、講習会での映像のDVD（郵送）も参加費に含まれている。

別途、EHFが用意したホテルに宿泊する場合、シングルかダブルによって費用が異なるが、一泊€60～€75（10,000円前後）の費用がかかる。朝昼晩の食事代については、オプションで注文することができ、1日につき€30（約4,200円）かかる。合算すると、約€700（約10万円弱）ほどかかる（5日泊計算）。現地の安いホテルで安く済ませる方法もあるが、EHFのホテルに泊まることで、セミナーに参加している様々な国のコーチ、ヨーロッパ選手権に参加しているレフェリー、選手などと一緒の場所で食事をする場合が多く、そこで多くのつながりをつくることができるのがメリットである。費用がかさんでしまうが、多くの国々の人と交流をしたい場合は、EHF指定のホテルが良い。支払い方法については、現地で現金で支払う。もしくは、振込みで支払う。【€1 = \140計算（2014年8月現在）】

Ⅵ. おわりに

全日程4日間は、講義、トレーニング、U-18男子ヨーロッパ選手権観戦を含めて、4日間9時～20時半まで受講しハンドボール漬けの毎日となり、非常に充実したものであった。今年は、7月にはYoung Coaches' Workshopがオーストリアで開催されたこともあり、参加者70人の多くが地元のポーランド人であった。参加者の中には、モントリオール五輪銅メダリストのAndrzej Lech氏が参加していた。また、ホテルではナショナルチームと同じホテルの泊まったことで、フランス代表の監督やコーチと話すことができ、非常に有意義なものになった。（資料6・7）



（資料6）EHF講師陣とAndrzej Lech氏（左上）



（資料7）Didier Dinart氏

講習会に参加することに意義を感じている一方で、ある程度の語学力が必ず必要であることも感じた。筆者は、オーストラリアでのホームステイの経験があり、英語で日常会話はある程度話すことができるが、講義内容には、専門用語が出てくることも多く、すべてを理解できていない部分もあった。その際には、単語を辞書で調べたり、一緒に講義を受けている受講者に意味を聞いたりして、理解に努めた。一定の語学力がなければ、受け手になりたくなくても、受け手になってしまったり、積極的に質問をしたりすることが難しくなってしまう。

今後、こうした海外の講習会に参加を考えているのであれば、少しでも、語学学習を事前にすることや海外に慣れておくことが大切になってくると思う。

ここにすべての講習内容をすべて載せることができないが、EHFのCANのシステムでは、情報を共有することで、ヨーロッパ全体の有益につなげていることから、講習会の資料はインターネットを通じて誰でも閲覧可能としている。（http://www.eurohandball.com/news/activities）

最後に、この機関誌に携わり、駒澤大学・村松先生のお力添えをいただきましたこと、感謝いたしております。

スコアールーム①

第43回全国中学校大会

開催期日：2014年8月17日（日）～20日（水）
会場：愛媛県・松山市

【男　子】

▼ 1回戦

若松（千葉） 31（15－7、16－19）26 横須賀（愛知）
椿（開催地） 29（13－7、16－13）20 総社西（岡山）
大住（京都） 27（13－16、14－10）26 松橋（熊本）
滝ノ水（愛知） 20（8－8、9－9）19 西中原（神奈川）
（2－2、1－0）

▼ 2回戦

明倫（福井） 38（20－14、18－20）34 若松（千葉）
多々良中央（福岡） 22（8－8、14－7）15 高砂（兵庫）
培良（京都） 41（21－12、20－14）26 菰野（三重）
椿（愛媛） 29（11－12、13－12）28 厚別北（北海道）
（3－3、2－1）
香川第一（香川） 31（15－15、16－15）30 大住（京都）
東久留米西（東京） 33（17－14、16－15）29 氷見北部（富山）
吉塚（福岡） 25（12－13、13－11）24 信夫（福島）
平田（山口） 24（14－12、10－8）20 滝ノ水（愛知）

▼ 準々決勝

多々良中央 24（7－9、17－14）23 明倫
培良 32（19－6、13－11）17 椿
東久留米西 37（21－14、16－16）30 香川第一
平田 26（11－3、15－9）12 吉塚

▼ 準決勝

培良 32（14－12、18－8）20 多々良中央
東久留米西 35（19－11、16－14）25 平田

▼ 決　勝

培良 34（14－12、20－17）29 東久留米西

【女　子】

▼ 1回戦

原川（大分） 25（14－7、11－6）13 麻生（茨城）
本宮第一（福島） 30（13－4、17－7）11 雄新（愛媛）
下津井（岡山） 20（10－6、10－8）14 緑ヶ丘（奈良）
住吉第一（大阪） 18（13－7、5－10）17 芦城（石川）

▼ 2回戦

原川（大分） 29（17－11、12－7）18 明倫（福井）
平田（山口） 29（9－8、20－10）18 西笹川（三重）
神森（沖縄） 23（10－4、13－7）11 山梨南（山梨）
培良（京都） 34（17－12、17－15）27 本宮第一（福島）
下津井（岡山） 35（21－7、14－12）19 凌雲・光成（北海道）
今治（愛媛） 15（6－5、9－5）10 東山（岐阜）
港川（沖縄） 26（10－10、9－9）21 平針（愛知）
（3－1、4－1）
住吉第一（大阪） 17（8－6、9－10）16 けやき台（茨城）

▼ 準々決勝

平田 25（12－14、13－10）24 原川
神森 26（11－9、15－10）19 培良
下津井 21（9－9、12－9）18 今治
港川 22（14－7、8－7）14 住吉第一

▼ 準決勝

神森 21（16－12、5－8）20 平田
港川 22（13－10、9－7）17 下津井

▼ 決　勝

湊川 16（6－5、10－7）12 神森

スコアールーム②

第41回全国高等専門学校ハンドボール選手権大会

開催期日：2014年8月18日（月）～19日（火）
会場：徳島県・鳴門市

▼ 予選リーグ第1ブロック

津山高専 19（8－8、11－10）18 函館高専
津山高専 30（14－11、16－14）25 金沢高専
函館高専 25（10－13、15－12）25 金沢高専

▼ 予選リーグ第2ブロック

有明高専 33（18－8、15－9）17 東京高専
有明高専 57（29－9、28－4）13 阿南高専
東京高専 44（24－6、20－7）13 阿南高専

▼ 予選リーグ第3ブロック

大阪府大高専 34（14－10、20－12）22 豊田高専
大阪府大高専 36（21－11、15－13）24 一関高専
豊田高専 38（19－13、19－17）30 一関高専

▼ 予選リーグ第4ブロック

徳山高専 29（14－9、15－13）22 北九州高専
徳山高専 39（15－13、24－14）27 高知高専
北九州高専 33（14－15、19－14）29 高知高専

▼ 準決勝

有明高専 29（14－11、15－15）26 津山高専
徳山高専 28（15－9、13－11）20 大阪府大高専

▼ 決　勝

徳山高専 31（16－10、15－14）24 有明高専

スコアールーム③

第16回全日本ビーチハンドボール選手権大会

開催期日：2014年8月23日（土）～24日（日）
会場：愛知県・南知多町

【男　子】

▼ 予選Aブロック

Asian Beach Game 1－2 FST BH2014
Asian Beach Game 2－0 中京大学
Asian Beach Game 2－0 HC KUMASAN
FST BH2014 2－0 HC KUMASAN
FST BH2014 1－2 中京大学
中京大学 2－0 HC KUMASAN

▼ 予選Bブロック

HC大阪 1－2 MJクラブ
HC大阪 2－0 My summer vacation!
MJクラブ 2－0 My summer vacation!

▼ 予選Cブロック

東海Weeds! 2－0 はぁふぽてと
東海Weeds! 2－1 大同大学
はぁふぽてと 0－2 大同大学

▼ 1回戦

My summer vacation! 2（20－2、8－7）0 HC KUMASAN
中京大学 2（12－13、16－15、8－7）1 大同大学

▼ 準々決勝

Asian Beach Game 2（31－6、24－11）0 はぁふぽてと
FST BH2014 2（12－13、14－5、4－2）1 HC大阪
MJクラブ 2（13－9、18－6）0 中京大学
東海Weeds! 2（16－13、21－11）0 My summer vacation!

▼ 準決勝

FST BH2014 2（11－18、17－12、10－8）1 Asian Beach Game
MJクラブ 2（20－21、18－16、4－0）1 東海Weeds!

▼ 決　勝

MJクラブ 2（10－8、9－15、8－6）1 FST BH2014

【女　子】

▼ 予選Dブロック

Asian Beach Game 2－0 東海Weeds!A
東海Weeds!B 0－2 ハミングバード
Asian Beach Game 2－0 SHINE
東海Weeds!A 2－0 東海Weeds!B
ハミングバード 1－2 SHINE
Asian Beach Game 2－0 東海Weeds!B
東海Weeds!A 1－2 SHINE
Asian Beach Game 2－1 ハミングバード
東海Weeds!B 0－2 SHINE
東海Weeds!A 1－2 ハミングバード

▼ 1回戦

東海Weeds!A 2（14－5、13－4）0 東海Weeds!B

▼ 準決勝

Asian Beach Game 2（13－4、14－3）0 東海Weeds!A
SHINE 2（15－11、15－9）0 ハミングバード

▼ 3位決定戦

東海Weeds!A 2（14－7、10－4）0 ハミングバード

▼ 決　勝

Asian Beach Game 2（10－13、10－9、7－6）1 SHINE

■編集後記■　リニューアルした日本協会ＨＰにはトレーニング用の映像を新たに掲載しているが、国内外でハンドボールの普及に取組む人たちによるトレーニング用の映像を取り入れたWebサイトが、多く出現してきている。直近に触れた中には、興味深いサイトも多々ある。［参考例示：（URL http://happy-handball.smassh.net/)］今後も、Web化した様々な映像が配信されるであろうが、見るもの（選手・指導者）は漫然と視聴しているのでなく、夫々の映像の特徴を切り分ける眼力も必要になってくる。利用者の利便性を高めた見やすく、分かりやすい映像は今後益々増えるであろうし、この広がりがハンドボール競技人口の拡大に繋がればと期待する。（編集委員長）

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」9月入会・継続会員

【埼　玉】松本隆栄【東　京】田島雅史、土田　健、平賀とみ子【神奈川】種村明彦【愛　知】田中基明、小林美夏、岡山尚司、岡山美恵子、牧野千別、滝　守功【大　阪】宮﨑　寛【兵　庫】中野雅介、中野聖子、中野秀祐、中野主博【和歌山】大橋吉次【広　島】青戸克好

【11月の行事予定】

【会議】……………………………………………………
　11月8日(土)　常務理事会

【大会】……………………………………………………
　11月14日(金)～21日(金)
　　第4回アジアビーチゲームズ（タイ・プーケット）
　11月22日(土)～23日(日)
　　第12回日本車椅子競技大会……（徳島県・鳴門市）
　11月22日(土)～26日(水)
　　高松宮杯男子57回女子50回全日本学生選手権
　　…………………　（岐阜県・岐阜市、各務原市）

HAND BALL CONTENTS Nov.

「がんばれハンドボール20万人会」サポートについて
　中野利一……………………………………………1
第6回男子ユースアジア選手権
　団長・志々場修二…………………………………2
　監督・内記　徹……………………………………3
　主将・安倍竜之介…………………………………4
第43回全国中学校大会
　総評・堀内佐波……………………………………6
　男子優勝：培良中学校・平舘一馬、千葉海斗………7
　女子優勝：港川中学校・神谷加代子、真座あすか…8
第41回全国高等専門学校選手権大会
　優勝：徳山高専・池田光優、角村将太…………… 12
　総評：松浦史法…………………………………… 13
第16回全日本ビーチハンドボール選手権大会
　大会レポート・沖本哲郎………………………… 14
　男子優勝：MJクラブ・武野量介 ………………… 15
　女子優勝：Asian Beach Game・山本沙貴
2014年カテゴリー別日本代表選手団名簿：男子 … 16
2014年カテゴリー別日本代表選手団名簿：女子 … 17
第22回日・韓・中ジュニア交流競技会
　報告：船木浩久、阿部富夫、下地利輝、中村誠忠、
　　　　中山　学、斗米茉月、村松沙耶…………… 18
第34回全国クラブ選手権大会中地区大会
　総評・植村真司…………………………………… 22
　男子優勝：ボンチフェローズ・大野順也………… 23
　女子優勝：御座候・関山明子
フリースロー：日本リーグの集客を考える　早川文司　24
医事委員会だより：帯同報告……………　貝沼圭吾　26
医事委員会だより：帯同報告……………　有田　忍　28
2014NTSブロックトレーニング
　北海道・葛西　猛、関東・菊田政行……………… 30
　北信越・土橋雅実、近畿・繁田順子……………… 31
審判部報告：第6回男子ユースアジア選手権に参加して　本田昭太、田渕元雄……………………………… 33
2014 EHF Youth Coache's Course ……　岩塚善哉　36
スコアールーム：第43回全国中学校大会／第41回全国高等専門学校選手権大会／第16回全日本ビーチ選手権大会…………………………………………………… 39
編集後記／20万人会会員／11月の行事予定／もくじ
………………………………………………………… 40

molten®

For the real game



For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」
私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに
世界に類のない、ボールとスポーツエキップメント・メーカーとして
常に完璧な製品づくりを目指しています。

株式会社 モルテン　東京都墨田区横川五丁目5-7

www.molten.co.jp

（公財）日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第五四七号

平成二十六年十月二十六日印刷
平成二十六年十一月一日発行

東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 代表〇三ー三四八一ー二三六一
振替 〇〇一二〇ー七ー一〇二九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円